

ア女基 98-6

1999年3月

『援助交際』に対する 男性の意識の分析

研究代表者 福富 譲
東京学芸大学教授

財団法人 女性のためのアジア平和国民基金

無断転載を禁じます。
(財)女性のためのアジア平和国民基金
1999年3月発行

この報告書は、アジア女性基金が東京学芸大学教授の福富 譲先生に調査研究を委託した「『援助交際』に対する男性の意識の分析」の報告書です。

目次

I. 背景と研究の目的	1
I - 1 『援助交際』をめぐる論議と問題点	1
1 - 1 - 1 雑誌における『援助交際』題材記事	1
1 - 1 - 2 『援助交際』の捉え方	1
1 - 1 - 3 『援助交際』に対する女子高校生の意識と背景要因	3
1 - 1 - 4 『援助交際』をめぐる議論の問題点	3
I - 2 研究の目的	4
I - 3 研究の方法	4
II. 面接結果	6
〔第1回〕	6
〔第2回〕	7
〔第3回〕	8
〔第4回〕	10
〔第5回〕	11
〔第6回〕	12
〔第7回〕	13
〔第8回〕	14
〔第9回〕	15
〔第10回〕	16
〔第11回〕	18
〔第12回〕	19
〔第13回〕	21
〔第14回〕	22
〔第15回〕	24
〔第16回〕	25
〔第17回〕	26
〔第18回〕	27
〔第19回〕	29
〔第20回〕	31
〔第21回〕	32
〔第22回〕	34
〔第23回〕	35
〔第24回〕	37
〔第25回〕	38
〔第26回〕	39
〔第27回〕	40
〔第28回〕	42
〔第29回〕	44

〔第30回〕	45
〔第31回〕	47
〔第32回〕	48
III. 考察	51
III-1 現代の中高生の若者をどのようにみているのか	51
III-1-1 いじめ問題について	51
III-1-2 行動傾向や心理的特徴について	51
III-1-3 若者の服装等について	52
III-2 『援助交際』について	53
III-2-1 『援助交際』に走る理由について	53
III-2-2 『援助交際』を生み出している社会的原因	54
III-2-3 『援助交際』の問題性と大人や社会の対応	54
III-3 『援助交際』の相手をする大人について	55
III-4 男女平等について	57
III-5 メディアについて	60
III-6 学校について	61
III-6-1 教育の制度や体制について	62
III-6-2 教師の質について	63
III-6-3 学校での指導の内容について	63
III-6-4 指導の方法について	64
III-7 家庭について	64
III-7-1 家庭の機能や役割について	65
III-7-2 父母の役割について	65
III-7-3 親の質的な変化（幼稚化）について	66
IV. まとめと今後の課題	69
引用文献	72

研究代表者 福富 譲（東京学芸大学 教授）
 成田健一（東京学芸大学 助教授）
 字井美代子（東京学芸大学 大学院）
 菊島充子（東京学芸大学 大学院）
 井出智紀（東京学芸大学 大学院）
 大浜毅美（東京学芸大学 大学院）
 宮城須賀子（東京学芸大学 大学院）
 田中千佳子（東京学芸大学 大学院）
 秋田有紀子（東京学芸大学 研究生）
 辻みつ子（東京学芸大学 研究生）

I. 背景と研究の目的

I-1 『援助交際』をめぐる論議と問題点

I-1-1 雑誌における『援助交際』題材記事

いわゆる『援助交際』を題材とした記事は、いつ頃から登場するようになったのであるか。菊島・松井・福富(1999)は、財団法人大宅壮一文庫雑誌牽引検索サービス及び国立国会図書館雑誌記事索引サービスにより、『援助交際』をキーワードとして、雑誌記事や雑誌に掲載された評論や意見を検索し、1998年9月の時点で153点を抽出している。図1は、月別の記事件数(特集は1件と数えている)を示したものであるが、1997年2月から漸次増加を示し、同年の7月にピークを迎える。その後は特定の月を除いて現象傾向にある。

『援助交際』は、そのネーミングを含めて、マスコミによって過剰なまでに社会的センセーションが煽りたてられた社会現象である。従って、雑誌記事の現象傾向をもって、この現象に内在している本質的な問題が一掃されたとは限らない。現象そのものが内在的に常態化してマスコミの興味を失ったのか、それとも、現象そのものが一過的なものだったのかが問われなければなるまい。前者であるならば、マスコミによるセンセーショナルな報道喧噪に煩わされることが無くなった今日は、事柄の本質的問題の解決に向けて分析する好機となる。後者の場合でも、たとえ現象そのものが一過的な流行であったとしても、『援助交際』に内在していたさまざまな問題性が一掃されたとは思われない。

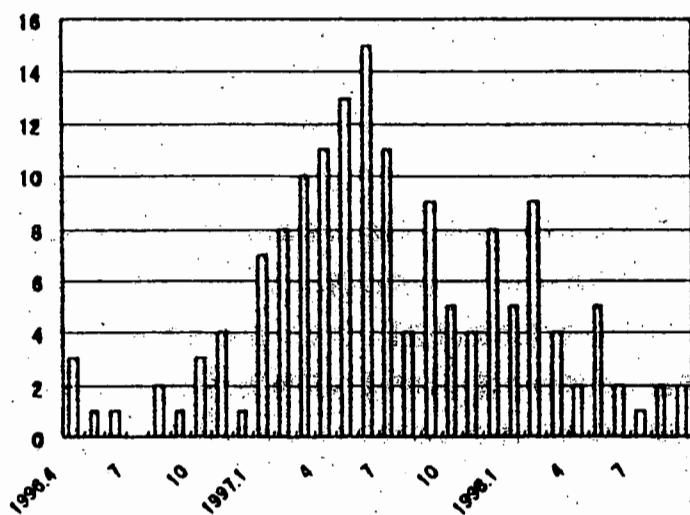


図1 『援助交際』に関する年度別記事数

I-1-2 『援助交際』の捉え方

『援助交際』に内在する問題性やその原因について、これまでに、どのような視点で分析されてきたのであろうか。この問題は、前述した『援助交際』の本質的問題を探る上で欠かせない分析の枠組みとなる。菊島・松井・福富(1999)は、『援助交際』に関するこれまでの議論を四つに分けて整理しながら、『援助交際』の是非についても立場が分かれていることを指摘する。

第一は、『援助交際』を生み出す社会的要因に注目したもので、当事者である本人の問

題というよりも、現代社会の全般的な傾向を反映したものとして分析される。例えば、宮台(1998b)は、男性の買春を許容してきた社会的風土を少女自身がとらえ、家庭・学校・地域以外の第4の空間に居場所を求め始めた結果であると指摘する。原田(1997)、庄子・島村・谷川・村瀬(1997)も同様に、男性の買春に対する社会的許容の風潮を指摘しており、宮台(1994)、河合(1997)は、さらに親子関係の希薄化と表層化を指摘している。

第二は、教育的観点から、『援助交際』に走らないようにするための教育の方策を中心に論じられるものである。特に、学校教育における性教育のあり方が論じられ、正確な性知識の伝授と生き方や異性との関わり方を含む広範な性教育の必要性が強調されている(原田真知子, 1997; 原田留美子, 1997; 橋上, 1997; 丸山, 1997; 岡田・山下, 1997; 庄子・島村・谷川・村瀬, 1997)。

第三は、『援助交際』を行うものの個人的背景要因を調査結果から分析したもので、特に、家庭環境における親子関係や親への愛情・信頼の影響等が指摘されている(河野・内田・川名, 1998; 速水, 1998a; 庄子・島村・谷川・村瀬, 1997; 福富, 1998)。

第四は、フェミニズムの視点からの分析であるが、売買春を否定することは売春を行う女性の差別に結びつくというフェミニストの主張もあり、売る側の主体的意志の解釈をめぐって『援助交際』についての議論も複雑に多様化している。例えば、若尾(1997)は、女性の身体が買春と家族主義により支配されてきた中で『援助交際』が生じていると指摘し、永田(1997, 1998)は、性道徳の視点から売買春は否定されるべきものとして、『援助交際』についても同じような問題を含んでいるとする。宮(1998)は、強制による売春と自由意志によるものを区別しながら『援助交際』の特有性を考慮すべきと指摘、上野(1998)は、『援助交際』は相手を選べるという点で、選ぶことができず単に「商品」として扱われる他買春と異なっていると指摘する。

以上の論議の中で、『援助交際』の是非に関して、立場が分かれている。一つは、『援助交際』を必ずしも悪と否定せず、その体験に何らかの肯定的な意義を認めようとする立場である(宮台, 1997; 宮台・藤井・中森, 1997; 藤井, 1998)。これらに対して、背景となる社会の持つ問題点を強調することは、『援助交際』に内包される問題性を曖昧にするといった批判もなされている(中野, 1997; 大平, 1997)。

第二の立場は、『援助交際』そのものを否定しようとするもので、共同体の倫理から否定されるべき(佐藤, 1998)としたり、前述した教育的観点から否定を前提にして、いかに『援助交際』の問題性を中高生に伝えるかが論じられている。

『援助交際』は、それが性的行為を伴うものであれ、お茶やデートだけに留まるものであれ、金品を媒介に何らかの性的(女性としての)サービスを提供するものである以上、本質的に「売買春」と変わらない。特に、経済を媒介に一方が他方を性的に支配するという「支配-被支配」の関係は、男女間の差別的格差を助長するものであり、女性の性的自尊感情の剥奪や性と生殖の健康と侵害を生み出す女性差別に結びつく行為である。たとえ本人の意志に基づいたものであっても、関係そのものが生み出す社会的な結果は、歴史的に作られてきた男女間の差別的格差を促すことになり、こうした格差を是正し一掃しようとする努力に抗うことになる。男女間の差別的格差が依然として根強く残っている今日的な社会状況にあって、こうした関係そのものが生み出す効果に鑑みても、『援助交際』を是認するわけにはいかない。

さらに、『援助交際』において対象を女子中高生に限定することは、「女性の価値=若さ」といった伝統的な男女の差別構造の再生産にも結びつく。まさに『援助交際』に内包される問題は、「性の商品化」の対象として一方的に女性を位置づけることであり、男女平等社会の実現に抗うことにある。

1-1-3 『援助交際』に対する女子高校生の意識と背景要因

女子高校生たちは、『援助交際』の持つ問題をどのように考えているのだろうか。売買春や女性の性が性的欲望の対象として商品化されている現状についてどのように考えているのだろうか。さらに、性的成熟を果たしつつある女子高校生たちは、社会の中で「女性」という自らの立場をどのように位置づけ、これらの現実と向き合っているのだろうか。こうした問いかけは、男女平等そのものに対する問い合わせに帰結する。

こうした問題意識のもとに福富(1998)は、『援助交際』に対する女子高校生の意識と背景要因を分析している。家庭環境に関して、親に対する愛情や信頼感が大きな要因となっており、特に干渉的な親や甘やかす親の態度との関連が示唆された。友人環境に関して、『援助交際』に対する抵抗感が低いものは、周囲に経験している友人が多く、友人に対する同調傾向や自己開示傾向が強いことが示され、友人の影響の大きさが指摘された。経済環境に関して、自分の持ち物や服等が周囲に較べて「いい」ものかどうかという、「相対的貧困観」が動機となり、高度消費社会の中で購買に駆り立てられた女子高校生が、容易に高額の金品を獲得するための手段として、『援助交際』に走るという図式がしめされた。学校環境に関して、教師は『援助交際』に対する不安感を高めるものの、抵抗感を高めたり経験を抑える力になっていない。情報環境に関して、各種移動体通信機器（携帯電話・PHS・ポケベル）の所持や、マスコミ鵜呑み傾向との関連が強く、マスコミによる過剰な報道が『援助交際』に対する抵抗感を麻痺させている様子が指摘された。

心理的背景に関して、現代青年の特徴の一つである交友関係における「群れ志向」の背景にある「個人志向」と「ミーイズム（私事主義）」が『援助交際』の許容的態度とも関連していること、享楽主義、将来への無関心、私事の世界に閉じこもる、関心の狭さとの関連性が指摘されている。さらに、自己存在感の低さ、ぬくもり希求の高さ、自己充実感の低さ、賞賛獲得欲求、公的自意識、加齢不安、女子高校生ブランド意識とも関連している。時間的展望のなさ、若さへの過剰な執着、享楽的生活志向の生活態度が、『援助交際』に対する肯定的態度と強く結びついており、これらに自己充実感や自己存在感のなさが加わり、他者から認められようとして『援助交際』に向かわせるのだろうか。

その他、抵抗感の低いものや経験のあるものは、精神的健康尺度の不安・不眠傾向が強く、問題行動念慮、非行規範、性情報への接触（テレクラ、Q2、伝言ダイヤル）との関連も指摘されている。

最後に、男女平等との関連では、男女平等規範意識が『援助交際』に対する抵抗感・経験と関連していることが示され、男女平等に対する日常的な不満や関心に終わらせることなく、いかに規範意識として内在化させるかが、今後の課題として提言されている。

1-1-4 『援助交際』をめぐる議論の問題点

『援助交際』を単に女子中高生の今日的な社会現象として特定化し論ずるだけでは、問

題は解決されない。『援助交際』が男女平等社会の実現に抗う社会病理現象とするならば、その病根を断ち切る努力を生み出すためにも、『援助交際』そのものに内包している問題性を明らかにする必要がある。そのために、一方の当事者である女子高校生たちの『援助交際』に対する意識の分析は意義がある。しかし、もう一方の当事者である買う側の意識の分析が不可欠であることは言うまでもない。それにもかかわらず、『援助交際』に関するこれまでの議論の大半は、その焦点が専ら売る側の少女に向けられ、買う側の男性に関するものが極めて少ない。

女子高校生を社会から切り離して分析するだけでは、彼女たちに対する効果的な指針を得ることは難しい。彼女たちの抱える問題は、社会そのものの問題でもあり、彼女たちの有り様は社会の鏡として社会の病理の反映でもある。こうした視点に立脚するならば、彼女たちを取り巻く社会の中で生きている大人たちの意識が問われなければならない。従って、『援助交際』にかかる買う側の大人の分析も、彼らを社会から切り離すことなく、社会の中に生きる大人の中に位置づけてなされなければならない。

親を始めとする社会の大人们は、どのような社会の構築を目指そうとしているのか、その目的に即して彼女たちにどのような環境を提供してきたのだろうか。女子高校生たちに男女平等意識を確立させるためにも、家庭や学校や社会全体が自らの男女平等の視点を吟味することが不可欠となる。この点に関して原田(1997)や山本(1997)は、男性にこそ性教育が必要であると指摘している。

1－2 研究の目的

福富(1997, 1998)は、女子高校生の面接調査及び質問紙調査を通して、『援助交際』に対する批判的態度を形成し、『援助交際』を払拭させるためには、彼女たちに男女平等規範意識を確立させることが重要であることを明らかにした。現実の社会の中には、未だに不要ないわれなき性別による束縛が数多く存在している。こうしたいわれなき束縛を一つ一つ明らかにし、そこから解き放たれることができ、男女平等社会の実現を可能にし、ひいては女子高校生たちから『援助交際』を払拭させることに結びつくと考えられる。この場合に、彼女たちを取り巻いている大人(男性)側の意識や役割を無視することはできない。

本研究の目的は、女子高校生を取り巻く大人(男性)たちが、『援助交際』をどのように考えているのか、『援助交際』と男女平等との関連をどのように考えているのか、そもそも男女平等社会やその実現をどのように考えているのか、青少年に対する大人の責務や役割をどのように考えているのか、等々を解明するための調査研究の枠組みを検討しようとするものである。これによって、現在ほとんどなされていない大人(男性)側の調査研究の方途が開かれ、男女平等社会の実現に向けての青少年に対する施策がより具体化されるものと思われる。

1－3 研究の方法

首都圏に在住している30才以上の男性社会人33人を対象に、個別面接(対象者からの強い要請により二人同時に面接したケースが1例あった)により聞き取り調査を実施した。

対象者の年齢区分は33才から68才にまでわたり、その内訳は、30代が6名、40代が13名、

50代が12名、60代が2名であった。職業も多岐にわたっており、広告代理店勤務が2名、一般企業勤務が12名(経営者・役員を含む)、個人商店主が3名、マスコミ関連に勤務が3名、家裁調査官2名、小学校教員が2名、中学校教員が1名、高等学校教員が2名、小学校長2名、公務員が2名、自衛官が1名、農業1名であった。

対象の選択は、年齢と勤務先を考慮しながら、可能な限り広範な人々を選択したが、住民票等からのランダムサンプリングによるものではない。従って、今回の調査結果は、男性社会人の全体像を代表するものとは言えない。しかし、今後の調査分析のための枠組みを検討するという、今回の研究目的に照らして有効な示唆を得ることができた。

面接の導入は、対象者の年齢・職業・家族構成等を考慮してなされたが、基本的に「中高生の今日的問題は、現代社会の反映と考えられること。中高生を対象にした調査研究は多くなされているが、社会人、特に男性社会人を対象にした調査研究が少なく、今後の研究に向けての枠組みを模索していること。今回の面接は、こうした枠組みを検討するための資料収集であること。」を述べ、「個人的に日頃お考えていることをお話し下さい」という導入から始めた。

面接内容は、話の展開によって多様になったが、基本的に「現代の中高生の問題について」「若者の服装等(ルーズソックス・ピアス・制服に短いスカート等)について」「『援助交際』について」「『援助交際』の相手をする大人について」「男女平等について」「メディアの報道について」「学校(教育や教師)について」「家庭(しつけや親)について」等について、日頃の考えを話してもらうよう教示した。

II. 面接結果

第1回 KO (1961) 広告代理店

(中高生の問題について)

いじめの問題等は昔からあった。しかし、あそこまで徹底的にはやっぱりやらなかった。やっていいことと、悪いことについてのルールがあったが、今は曖昧になっている。

(若者の服装等について)

短いスカート等、周りが性の対象として見てしまう。襲われてもしょうがない。自分も、短いスカートは気になる。特に、きれいな子については。ただ、見るだけ。自分の娘がしたら、はり倒してしまいかねない。ピアスや茶髪については、自分と関係のない人がやる限り、何とも思わない。部下がしたら、相手先のことを考えて、上司として駄目。

(『援助交際』について)

風俗の世界で働く人は、母親が借金に困り、母親の了解の上でというのもあり、いろいろなケースがあるという感じ。風俗店に働く人はプロ。客も相手も同意している。自分の武器を使って稼ぐのだと割り切ればいい。そのような選択もありうる。しかし、高校生の『援助交際』の場合、社会的な現象に乗っかって、安易に金を稼ぐ方法としているだけ。その点で女子高校生もずるい。大人になりきれていないのに、性を武器に使うのは早い。市場の原理(高校生だから高く売れる)に乗っかっているだけという意味でするい。

(『援助交際』の相手をする大人について)

寂しい人。売春は、世の中に女と男がいる限り、商売としてなくならない。月に100万近く稼げる場があれば、無くならない。しかし、女子高校生を相手にするのは汚らしい。東京都の淫行条例については、ある程度の年齢まで判断が未熟であるので正しい。20才ぐらいまでは制限したほうが良い。

男性は、素面の時に抑制できても、酔っぱらうと抑制できなくなる時もある。今後、自分は絶対やらないかと言われれば、時と場合による。周囲に妙齢な女性がいれば、自信がない。

(男女平等について)

女性の社会進出について、男だから女だからという考えはない。できる人間に仕事が集中する。女性は家にいて、子どもを生んで、育ててと言うのが当たり前だったが、今はそうでなくなった。子どもがある程度まで育ったら、自分の世界を持つのは正しい。自分の世話をしてくれと言っても、今時通らない。

(メディアについて)

テレビで言えば、視聴率が高い番組が正義で勝利。性表現が盛り込められている雑誌は、一

種の緩衝材になっている。

第2回 Y A (1950) 広告代理店

(中高生の問題について)

娘を持つ親として、由々しき問題。

娘との接触は心がけている。旅行なども家族全員でよくする。親に気を使ってくれる。

(若者の服装等について)

若者は、ファッションに関心がある。アクセサリーには関心無い。ルーズソックスは自分としては嫌いだが履いている。本人の選択の問題。校則に違反しない限り、仕方ない。

短いスカートは、親の問題。セックスを感じさせない服装が望ましい。犯罪に巻き込まれる危険性がある。短くするのは止めさせるべき。街角で着替える子どもがいるが、パブリックの感覚がない。周りが見えていない。他人に不快感を与えないように、家でしつけるべき。

(『援助交際』について)

由々しき問題。

(『援助交際』の相手をする大人について)

「なんたるか」という感じ。娘を持つ人ではない。自分は息子がいても、しない。モラルの問題。ただ、モラルの定義は広い。

東京都の淫行条例について、道徳観の問題だから法的に規制する以前の問題だが、現行では規制せざるをえない。

(男女平等について)

女性を武器に使うことはすべきでない。平等観を阻害している要因。仕事をする時には、女らしさを出さない服装がよい。

男とか女という意識をなくすことが平等。動物学的には雄と雌に分かれ、同じ優しさでもそれぞれの優しさが有るかもしれないが、男っぽくとか女っぽくということは嫌い。

教育方針も、男や女である前に、人間であることを心がけてきた。

女性の社会進出は望ましく、もっと雇用すべき。女性の購買層に対して女性が活躍できる場がある。ただ、都合がいい時だけ女を全面に押し出すのはよくない。扱い難い。プロ意識に欠けている女性も少なくない。

(メディアについて)

メディアの影響は大きいが、規制するのは難しい。作る側を規制するよりも、お互いに考えながら変えていくしかない。自由と規律の問題。自由は好きだが、自ずと規範がある。それを尊重していくのが大切で、法律とは関係ない。メディア側も自分で統制すべき。

(学校について)

自分としては女子校に入れたかった。女らしく育ってほしいから。同じ感覚の人が集まっているのがいい。公立学校が荒れているが、悲しく残念。子どもが孤独に思える。周りに物が多く過ぎて、選ぶ時に咀嚼して噛むという能力が無い。多過ぎる物の中に埋まっていて孤独。忙しさを理由にコミュニケーションを疎かにしている。

豊かな人間教育を目指しているが、受験が目標になっている。受験問題を見ると、テクニックだけが強調されていて、深みがない。学校が面白くないというのは当然。

勉強が出来ないのは一つの形であり、人生の中でたいして意味のない一瞬のこと。

勉強はできなくとも、問題意識を持つことが大切。

(家庭について)

基本的なしつけは、家庭でおこなうべき。ただ、集団生活の中のルールについては、家庭でできないので、学校で。他人に迷惑かけない、人に優しく、助け合はうは教えられても、どうして人を助けるか、関わり方については、実体として教えられない。そこは学校で。娘には、は、女らしく育ってほしい。具体的には、伝統工芸などに关心を持って、大工などになってほしい。娘のボーイフレンドについては、正直言って、当然、あんまりいい気はしません。結婚なんかしなくていいと、言う風に言うんです。ただ家内は女性ですから、そんなこと言っちゃいけない、人がやることは、普通にさせてあげなさい、と言っている。

第3回 A R (1941) 会社役員 O Z (1941) 会社役員

(中高生の問題について)

A : 正直言って世の中が心配。一番の原因是、メディア。情報過多で、頭でっかちになってしまいうことが一つの原因。小学校中学校でも電車で何処でも行けて、情報はテレビや週刊誌を通じてあらゆるもののが入ってくる。原宿あたりが中学生や高校生の溜まり場になっている。そういうところだけが取り上げられて、欲求不満に結びついていく。

O : 情報も通り一遍。今の子どもは、カラーが同じに見える。服装にしても話す言葉も、外から得る方が多い。各人各人の個性が、貧弱。

(若者の服装等について)

O : イメージとしては、なんであんな不便そうなものをと。

若者には、規制とかに反発する、とりあえずなんか拒否するという傾向がある。

A : 唯一、高校生が飾れるファッショ。個人的には、そんなに悪いとは思わない。でも、学校のカラーというのがあるから、そうしたものは大事にした方がいい。制服はその時しか着られないもの。

(『援助交際』について)

A : 基本的にはお金が欲しいからやってる。やりたくてやってる訳ではない。情報過多によって他人がよく見え、いろいろなものが欲しくなる。友だちがバック買えばそれも欲しくなる。ところが親からお金もらえない。アルバイトしてももらえる額じゃない。一番手っ取り早いことというので、そういう方向に転がって行っちゃう。それが大半。現状に感化されている人もいれば、昔風の考え方を持った、しっかりした女性もいる。両親の愛情の問題。しつけの問題。

O : ものがあり過ぎる。

(『援助交際』の相手をする大人について)

O : 大人の判断が間違っている。売ってるから買ってもいいというものではない。

少年法の適用年齢を引き下げるのも、弁護士連盟からクレームがついているけど、もっとお灸を据えてもいい。買う側、売る側の両方に。売るほうも、罪悪感がない。買う側、大人にしてみても、やっぱり罪の意識がない。もっと徹底的に、社会全体でやるしかない。

A : 東京都の条例化は、当たり前だと思う。そういう条例が出来ること自体、嘆かわしい。子どもたちの気持ちはわかるが、買うというのは、どんなに聴覚目に見ても、理解できない。マンガとか、テレビとか、くだらないものが多く過ぎる。そこから直していくしかしょうがない。日本ほど野放しにしている国はない。思いやりが必要。

(男女平等について)

A : 女性が、男性化している。男性が女性化するということもある。それが結局だらしないということになっている。平気で女性が男性の言葉を使っている。男女平等とは違う。男女平等というのは、マナーだと、道徳だと、そういうことを別にした、価値観、人間としての価値が平等であること。男性のやるべきこと女性のやるべきことがある。仕事の面に関しては、女性が社会の進出しているのはかまわない。実力ある女性は沢山いるから。あくまでも仕事面だけのこと。でも、男性には男性にしか出来ないことがあるわけですから、全てを女性に取られちゃうとか、リーダーシップを取られちゃうのは、おかしい。

短いスカートをはいたり、女性の若さや性を強調するようなことは、女らしさとは違う。あれは、男性の目を惹きつける本能。

O : 私の母は、女は何時も見られてることを意識しなければと言っていた。男性の目を意識するとかではなく、誰かに注目されているということは、どういう振る舞いをしなくちゃいけないかわきまえていること。それを、短いスカートや下着みたいなもので美しく見せようとしている。そういう主張の仕方は問題。

(学校について)

A : 学校で、自由主義をいかに教えるかで違ってくる。結局、受験ブーム。競争社会になり、勉強が何にでも優先してきた。

(家庭について)

A : 肉親、関係縁者から教えてもらったものがたくさんあった。その時はうるさいと思っていたけど、今はとても貴重に思える。今は、親が子どもに教えきれないことが、情報

過多のためにある。親も子どもも、自由主義の履き違えしている。欧米では、個人が責任を取ることだが、日本の場合は、親も子どもも責任を取っていない。父親の影響が薄くなった。

O：生まれてくる子どもの遺伝子の中に、肉親愛というDNAがなくなりつつある。

※(日本の特徴)

A：オーストラリアの場合、両親のいうことをよく聞く。しかし、18歳以上の青年になると独立心も旺盛になる。そうなると、自分のことは自分でしなければいけない。日本の子どもたちが誤解しているのは、独立心イコール自由。自由になったから何してもいいんだと。しかし、成人になったら、自分のコントロールは自分でしなければいけない。何をやってもかまわないけど、責任は自分で取らねばならない。日本は、二十歳になっても二十五になっても、親がいるうちは親にべったりで、仕事がなければ、親に食わしてもらう。家庭は、ばらばら。親子の交流も全くない。向こうは、たとえ離れていても、意志の疎通が満で、親は子どもに目を注いでいるし、子どもは親に迷惑をかけないように、自分の生活を自分で切り開いていく。

※(性情報の氾濫)

A：性の情報の氾濫は、いい影響よりも悪い影響の方が多い。

O：個人主義で思いやりがない。ただ、若い人々は、何かバッシングを受けた時の抵抗力が無い。

※(若者に対して、今、大人がしなければならないこと)

O：今の子どもたちは、メディアには弱い。そこで、ある種のカリスマを持った人達にめぐり合わせると、良くなっていくかもしれない。

第4回 YD (1951) 会社員

(中高生の問題について)

家庭をあまり省みず、離婚経験のある自分を振り返ってみて、世間で言う中高生のよくない傾向は、基本的に家庭に問題がある。

(『援助交際』の相手をする大人について)

端から見てうまくいっている夫婦でも、相当我慢している。「旅の恥はかきすて」というように、日本を離れると人格が変わる人がいる。周りに知っている人がいないと、平気で道徳心を置いていける。「誰にも迷惑かけない」という自分だけの論理が、悪いことに駆り立てる。

(学校について)

教師の中には、人生経験の少ないものがいる。去年まで大学生で、いきなり子どもを教えることは無理。その場の人間感情で人をリードすれば、必ずぶつかる。年配の教師には、子ど

から慕われるものがいるが、人生経験の差。

(家庭について)

家庭の影響は大きく、特に、母親のしつけ方が問題で子どもは良く見ている。母親は、たとえ仕事を持っていても、毎日ご飯を作るなどで子どもと接触することが大切。自分の思い通りにならないことに口うるさいと、子どもは反発する。子どもの気持ちを推し量って対処していく方法に欠けている。話す機会も一緒にいる機会も、母親が一番多い。

夫婦でいることに満足している人が少ない感じ。基本的な道徳心は、小学校の低学年までに作られるが、家庭でなされていない。

(地域について)

隣近所の目が少なくなった。親子が近所から独立してしまった。周りから「そんなことしちゃだめ」という環境がなくなった。周りの目がないから「人に迷惑かけていない」という錯覚が生まれる。

※最近の若者は、服装や態度といった外見に反して素直で礼儀正しい面があり、教育や親に対する反発。彼らにとって心地よい空間がない。

ただ、自分の置かれている状況の判断が出来ず、目前の楽志向が多くて仕事に対しても前向きに今を我慢する態度が少ない。

※若者にとって「人に迷惑をかけない」ことは、自分たちの基準だけでしか考えていない。
その意味で、周囲が見えていない。

第5回 S I (1951) 会社員

(中高生の問題について)

いじめの問題については関心がある。職業柄、転勤が多いから。子どもをいかに守れるかについて妻と話す。昔は、一発殴ってお終いだったが、今は陰湿。

ルールを守らない(携帯電話を電車の中で)子どもが増えてきた。

(若者の服装等について)

ファッションとして自由で良い。会社では困るけど、私服で街を歩くぶんには構わない。個人的には好きでないが、個人の好み。

(『援助交際』について)

想像を絶する。自分の常識では考えられない。息子しかいないから深刻に考えないが、感性がなくなってきた感じがする。そこまで単純にいくことが理解できない。親が気がつかないのが不思議。日頃から接していれば、遅く帰宅したり、身の回りのものが違う等、分かるはず。止められるかどうかは別。

(男女平等について)

当然のこと。女性はよくできるし、得意な分野がある。きめ細かさや調査・分析をきちんとする。子どもが生まれた後をどのように整備していくのかが今後の課題。子育て後に復帰できる制度をつくる。現実的には、復帰できるだけの資質を維持できるかが問われる。

(学校について)

小学校の教育をもっときちんとすべき。基本的な問題は小学校で決まる。最近、教師がサラリーマン化している。人間的、情熱的な教師が少ない。教師の職場をもっと魅力的にして基本的な部分を育成しなければならない。絵を描かせるにしても、もっと自由に個性を出すような指導が必要。教室の後ろで騒いでも、注意しない教師。家庭との連携も必要。

集団の中のルールを守らせる。

子どもに対するコメントを書かない教師もいる。教師の質にはばらつきがある。

(家庭について)

集団指導は家庭でできないので、家庭は家庭で自分の子どもとしてきちんと育てる。共稼ぎが増えてきたが、自分としては反対。子どもが中学生になったら良いが、それまでは両親のどちらかが(一般的には妻が)、一緒に生活して話を聞いてあげ、しつけや基本的な価値観・道徳観を育てることが大切。生活が苦しくて共稼ぎというより、親のエゴでより豊かなものを探している。子どもは、その犠牲者。自信をもって育てることが大切。子どもに無関心で自分の楽しみを追求している親が増えた。経済的に余裕が出来、楽しむ場も増えたから。

※若者のよい点は、人前で自由にしゃべれること。悪い点は、自主性がないこと。知識だけが先行している。共同作業を嫌がる。

第6回 KT (1962) 会社員

(中高生の問題について)

いじめ等が問題になっているが、子どもを見ていれば、親はわかるはず。

他人に迷惑をかけていることがわからない。他人に迷惑さえかけなければ、ケンカもしてもよい。

生活の基本的なマナー(上下関係を尊重する)ができていない子どもが多い。

(若者の服装等について)

他人に迷惑をかけない限り、別に構わない。

(『援助交際』について)

女の子は、一般に、年上に走りがち。男の子が幼稚になっている。自分としては、『援助交

際』する子どもの気持ちはわからない。

(『援助交際』の相手をする大人について)

自分の感覚の外側。自分の子どもの年齢を相手にする気持ちがわからない。子どものことを考えれば、当然しないはず。

(学校について)

進学問題が大きな障害になっている。体罰についても、一概に悪いとは思わない。体育会系のクラブを経験したこともあり、時には体罰も効果的になることがある。

(家庭について)

親の基本的なしつけがなされていない。子どもを過剰に甘やかし、過保護になっている。生活の中で、我慢することが学べていない。生活の中で楽しみが優先している。

※学生時代にファミリーレストランでアルバイトを経験しており、そこで接客の態度をみっちりしごかれたことが良い経験になった。加えて、大学時代の体育系のクラブ経験も基本的な上下関係についてのマナーが学べた。

第7回 IM (1951) 個人商店主

(中高生の問題について)

拝金主義が多過ぎる。お金を貯めることよりも、買ってから払う傾向が強い。

(若者の服装等について)

自分の社会通念とのズレを感じるけれど、見るだけなら、別に構わない。マスコミがあれだけ煽っていれば、欲しがったり、そういう格好をしたがるのも当然。

頭で勝負しないで、自分の持ち物で勝負しようとしている。持ち物で差別しようとする。

(『援助交際』について)

全て、お金だなという感じ。雑誌などの煽り方が異常。

自分の立場をわきまえている子どもは、決してそんなことをしない。

(『援助交際』の相手をする大人について)

家庭が余程つまらないのか、ストレスがそれ程までに強いのかという感じ。戦後、女性が強くなり、家庭でも男女同権の妻が強くなって、男としてつらいのかも。女性と、とことんまでいってしまうか、女性と一緒に飲んだり食事したりを楽しむか、どちらかになっている。自分は、若い女性がいるお店で飲むことは好きではない。25才ぐらいまでの女の子は、経験が足りなくて、ばかりで、背伸びしている。

(男女平等について)

平等思想というか、今は男も女もなくなってきた。女の子も平気で外泊できる。もっと多くの職場に女性が進出したらよい。トラックやタクシーの運転手も増えてきた。ただ、権利だけ主張して行動が伴わないのはよくない。頭でっかち。社会の体制が出来ていなければ、権利だけ主張すると、ひずみが出てくる。

家庭では、食事作りなど家事の分担はよくする。台所に入ることに抵抗はない。

(メディアについて)

雑誌等の煽り方は異常。特に女の子の雑誌は、いやらしい。男の子の雑誌は、視覚に訴えるだけだが、経験談などイマジネーションをかき立てる。まるで『援助交際』を煽っているような気がする。作り手が勝手に具合の良いように作っている感じ。

(家庭について)

親が二人とも遊んでいるから、しょうがない。いかに金をかけられるかで、全てが決まってしまう。子どもの発達についても、お金をかけねばうまくいくような風潮。

※子どもに対する期待は、生活力のある人になってほしい。お金は人を幸せにしない。

女の子に対する心配は、妊娠と病気。長男(20才)にも、中学生の時にコンドームを与えた(3年の時にスキーに行く際)。

第8回 IK (1949) 個人商店主

(中高生の問題について)

目標を持って生活している子どもが少ない。高校生で挫折してしまった感じの子を見るとかわいそうに思う。その頃に何かしないと、捌け口がない。捌け口を用意するのが大人の役割で、社会がいけない。

言葉づかいも、短縮して言葉を略してしまい、断絶を感じる。

(若者の服装について)

昔を振り返ってみても、自分もダボダボのズボンを履いたりしていたし、若い子はしょうがないという感じ。長いスカートの女の子は、垢抜けていなくて、古臭い感じ。清潔感にあふれるきちんとした生徒もいる。茶髪は不潔感がして嫌。ピアスも嫌、男の子に関しては特に絶対反対。息子もケバイ子は嫌だと。

(『援助交際』について)

子どもと『援助交際』について話したことがない。友達から情報が伝わっているかもしれないが。

(男女平等について)

普通に、そうだなあっていう思う。雇用面では難しい部分があるが、女性を差別するという気持ちで付き合ったことはない。女性の管理職(校長や官庁で課長)も増えているのは、いい傾向だと思う。しかし、それで結婚しない女性は、どうなっているのか分からぬ。結婚しないで仕事を続けようとする女性は、しょうがないのかなと。

体力的に男女は差があり女性は劣っているが、知的には女性の方がむしろ優秀かも。これからは、もっと女性が進出すると思う。女性の社会進出は良いと思う。

※三人の息子がおり、男子校と共学校に通っている。文化祭などで、男子校と共学校が違う、共学校の方が華やかで催し物も多彩だと指摘。

※娘がいたら違った育て方をする。どのような子になってほしいかについて、人に迷惑をかけない、自立していける子どもになってほしい。所帯主として、自立してほしい。

※家業を継がせるかについて、子どもの好きなようにと思っている。

※若い女性のいる店で飲むことは、最近ほとんど無い。かえってこちらが気をつかい、つまらない。

※息子に彼女ができたら、親として、きちんとつきあえとアドバイスする。妊娠させてしまうことまで考える。その際に、避妊について、今は話していないが話せると思う。

第9回 NS (1947) 個人商店主

(中高生の問題について)

いじめについては、殆ど心配していない。煙草については、子どもは家で吸っていない。一つの通り抜けるもの。やれとは言わないが、素直になってほしい。これからいろいろな状況に直面するだろうが、親がそれで悩んでもしょうがない。教育委員会などが、もっと真剣に考えてほしい。マスコミもどんどん叩いてくれればよい。

(『援助交際』について)

親も子どもと会話がないし、会社に追われているし、居場所がないのが原因だと思う。それが良いことか悪いことかの判断ができるのか、お金がほしいからか。やる子とやらない子の違いは、家庭環境にある。善悪の判断ができるような知識を与えること、学校でもしてほしい。

(男女平等について)

男の子と女の子で期待するものが違う。男の子に対しては、長男として家業を継いでほしいという気持ちがあるが、自分の仕事を持つて自立してくれればよい。今時、家業を継がせることは難しい、余程の老舗でないと。女の子に対しては、あまり期待していない。女性の自立は必要だと思うが、最低限の教育を受けて結婚してくれればよい。高校から先は本人次第。女性の社会進出については、話題になっているが、今のところ難しい。これからは、そうな

るかもしれないし、自由だが。

男性が軟弱になっている。職場で耐えるということは、女性には分からぬ。女性が強くなるとか、男性が強くなるというより、実力のある人が強くなればよい。

(学校について)

出来の悪い子どもに対して、もう少し教え方など面倒を見てほしい。勉強以外にも、きちんとした躾けを教えてほしい。自分たちには時間がないし、能力もないから、学校に期待するものは多い。

性教育についても、家庭と連絡を取りながら、ある程度までいろいろと教えてほしい。学校から帰ってから、いろいろな行動がありますから。

(家庭について)

環境があまりにも良過ぎるから、刺激を求めるのかもしれない。ある時期(二十歳ぐらい)までは、親の責任。共働きしている人もいるが。

男親の役割は、決断の時や最後の話し合いの時に、きちんとしてすること。

第10回 KA (1953) マスコミ

(中高生の問題について)

これまでの社会規範(礼儀作法など)が解体してきている時期にいて、それが問題になって現れているという感じ。

悪い方向に行くか行かないかは紙一重の違い。子どもの環境が殆ど均一的に良くなっている。極端に悪い環境にいる子どもは少ない。

テレビに出演する子どもたちは、目的もはっきりしていて、考え方もきちんとしている子が多い。普通の学校では、はみ出している子どもだと思うが、話しやすい。昔のタイプの人間という感じ。

(『援助交際』について)

お金に敏感に反応するから、極端になれば、『援助交際』の方にも走ってしまうこともある。

かっての性の解放が通俗的なレベルで浸透している感じがする。昔の貞操観念は別の世界になった。風俗の世界にいる人は、体を売ってお金を稼ぐといったお金中心。なぜ、男がそういう世界に行くのかは分からぬ。ただ、最近結婚が遅くなってきた。付き合う範囲が狭いからかもしれない。独りでいると、どうしても、そういう世界に走ってしまうこともある。

(『援助交際』の相手をする大人について)

自分の子どもの世代まで考えている人はいないのではないか。一つの風潮で、自分も付き合うなら若い女性の方がいい。男は40過ぎると、風俗的にそんな考えが多くなる。自分に照ら

しても、周囲を見ても、そういう傾向が見られる。この世代になると、妻や家族とは別の世界を意識するようになる。日常とは違った別の関係を作る可能性があるのではと、思ったりもする。人間関係で物足りない部分とか、自分に出来なかったことを、そういう関係に求めようとしているのではないか。

(男女平等について)

女性に社会参加の場が与えられても、社会そのものが男の作ったルールに従っている。その中に入ってきた女性は、それなりに悩むことも多い。男が作った社会にそのまま入ってきても、女性が作ったものではないので、どうしても落ちこぼれてしまう。

(メディアについて)

メディアの影響は強い。テレビ以上に出版物の影響。社会規範を解体している。

(学校について)

教師に物足りなさを感じる。人格者みたいな教師が、最近、少なくなってきた。かつて、放課後に非社会的なことも自由に話し合えた教師がいたが、今は少なく、授業以外のことを教えられない。

(家庭について)

35から40過ぎになると、会社での地位も上がり忙しくなる。つい、家のことが疎かになり分からなくなる。その時期(子どもが中学生頃)に、関わらないで、40半ば過ぎてから家を見ると大変な状況になっているというケースが多い。

団塊の世代の子どもたちから、校内暴力などいろいろな問題が始まった感じがする。その世代は、家庭のことを顧みなかつた傾向が強い。今の社会の問題、社会の風俗、『援助交際』なども、その世代が作っているという感じがする。学校が荒れ始めたのも、その世代の子どもたちのような気がする。

以前のように、極端に劣悪な家庭環境は少なくなった。父親参観日には、父親の姿を見ることができることができる。

(地域について)

以前は、周囲の人々がいろいろと役割分担していた。親子のケンカに対しても、隣のおじさんや間にはいったりした。そういう人間関係が、マンションなどでは皆無。

※団塊の世代についての考察で、この世代は一括りにくくれないところに特徴があると指摘する。昭和一桁世代はそれなりに一括りにできた。

※今の若者について、自己主張が強い人が多い(職業柄かもしれないが)。ただ、本当の自己主張かは分からぬ。周りを見ないで、知識の無いまま、駄々っ子みたいなところもある。世界が狭いとも言える。いい放しのまま。周囲も反論しないから、議論にならない。

(『援助交際』について)

ご馳走されたり、ちょっと大人風のことをする程度なら、分からぬこともないが、セックスまでとなると分からぬ。アバンチュールを楽しむこととのけじめがなく、たがが外れている。

(『援助交際』の相手をする大人について)

若い頃にはそれなりの経験もあったし、制度的にもあった。男として、いろいろな経験をすることには意味があるけど、安直に経験をお金で済まそうとする雰囲気が今でも続いている。風俗店と一緒に考えて、女子高校生とも付き合ってしまうという考えがある。

男女の関係についても、幼稚な部分での楽しみしか男は求めていない。その意味で、男の中に未発達の意識がある。企業社会の中で仕事以外の部分に喜びを創り出すのが失われている。文化に対するひ弱さであり、遊ぶ力も弱まっている。かっての旦那芸といったものがなくなったこととも繋がっている。

(男女平等について)

女性が社会に進出する時に男化している。男と同じことをして、自分を中性化しようとする。もう少し社会が成熟して、社会の中に女として出てこれたら、男も、違った女の魅力を見つけることができる。日本の女性は、女の魅力を安っぽいところでしか發揮していない。ブランド物とか体型といった外形を気にする。もう少し内面を深めるトレーニングが必要。例えば、伝統芸術(お茶・お花)などを通して、精神的な深さに触れることが効果的だが、今はない。

(学校について)

学校は基本的に勉強を教えるところ。基本的なしつけの部分は、今の制度ではできない。教科の勉強以外に、社会の中でどうあるべきか、一人の人間としてどうあるべきかが、学校でも家庭でも教えられていない。

(家庭について)

父親や母親が子どもに対して、女と男の良い関係といったモデルになっていない。これも企業社会の問題があり、男がほとんど家にいない。父親が家族のボスであった時代があったが、戦後は父親がボスであるという意識がなくなった。子どもに干渉せず、自由意志を尊重し、自分の道を見つけてくれればという意識で、子どもが自ら成長していくのを見守る意識が強い。でも、自由意志を自ら伸ばせる基本的な力を育てていない。こうしたしつけが甘い。

(地域について)

家庭や学校以外に、社会とか専門学校や同好のクラブがもっと豊かになる必要がある。地域の中で、同好集団などが一つの核となりうる。

今は、地域自体がかなり崩壊している。

※若者が本当に社会に反発していないと同時に、大人も同じで、信念を持って行動している人が少ない。団塊の世代には、議論の場があり、それを通して自分を鍛えることもできた。その時代の若者たちも、今は社会の中に納まって平凡に生きている。日本社会の意思力の弱さ、淡白さと関連している。

※今の若者は、我々と違った信号系に基づく微妙な感覚の広がりがあり、判断がそうした感覚と結びついている。

※男と女が、お金ではなくお互いに認め合って、セックスまで至るのは社会のモラルに反したとしても許せる。それが無い中で、セックスにまでいたるのは、文化が豊かでないことの証。

※20年前、30年前は、何かを作ろうとしていた。今は、守りに入っている。

※かつての大正社会は若者に対して対立するものを持っていて、若者はそれに対抗していた。社会に拳を振り上げることができた。今は、何でも飲み込まれてしまつて、対抗すらできない。何から何まで、無から出発しなければならない。

第12回 T E (1939) 家裁調査官

(中高生の問題について)

統計的には、終戦直後の混乱期に比べて、少年問題はずつと少ない。マスコミが報道しているようには、増えていない。質的には変わってきた。若者が変わってきたが、若者の問題はおとなとの問題。ストレートに出るのは若者。暴力問題も、今に始まったことでない。女子非行が少し増えてきた。

群れではいるが、その中でコミュニケーションがあるとは思えない。ただ、群れから外れることを非常に怖がり、群れから離れられない。

(『援助交際』について)

性の問題は、時代によって大きな違いがあり、社会的背景とか親の考え方等がかなり影響している。

『援助交際』をする子どもの中には、言葉の代わりに、そうすることで一種の繋がりを持っている場合がある。以前も性的にルーズな子どももいたが、セックスそのものが楽しいかというとそうではなく、接觸していることに(抱かれる)ある種の安らぎを感じていた場合があった。その意味で、寂しい子ども。しかし『援助交際』になると、群れているのと同じように、言葉のやりとりの代わりといった感じ。

将来に何を期待していいのか分からなくなっている。かつてのように先進国に追いつこうとしていた時代には、努力目標がはっきりしていた。

『援助交際』に走る子どもたちは、言葉で自分を語れず、コミュニケーションを取れない子どもたち。ブランドや流行に追いつくことに必死な子どもたち。着ているものでしか自分を語れない。それで自己表現しているという錯覚をしている。

(『援助交際』の相手をする大人について)

非常に寂しい、むなしい人たち。世代的には、親か親よりも少し下の世代の人たち。

(男女平等について)

男女平等と言うほど、平等ではない。親の意識の中にも、女性を人間として大事に見ていくという場がない。男女は質的に違うのだから、全く同じことをするのが平等とは思わない。質の違いを認めた上で、人間として平等であると考えるのが男女平等。家庭で問題が起きると、女の子がいろいろな負担をかぶってしまう。

(メディアについて)

例えば、どこかで子どもの自殺があったとすると、直ぐにいじめがあったとか無かったとかという報道になる。あったか無かったかを議論しても、意味がない。ただ、煽っているだけの報道が目につく。

(学校について)

子どもにとって価値は一面化している。勉強ができるかできないか。いい学校に入れるかどうか。極端な一元化。それに向かってみんなが走った。それで上手くいかなくなつて、大混乱が生じてきた。高校に入ってみても、その先が見えない。かって問題をおこす子どもは、学習が遅れていたり恵まれない環境だったが、最近はそれだけではない。能力が結構高い子どももいる。

学校の中にも縦関係が強く入り込んでいる。先輩・後輩の関係。力で生徒を押さえ込んだ頃から縦関係が増えてきた。平等が根づかない一つの原因。

(家庭について)

具体的に『援助交際』をしていることが分かれば、親はショック。しかし、その前段階での男女の有り様について、親は無関心というか許容的。親は見て見ぬふりをしている。

今の子どもたちの親がどのような社会的背景で育ってきたかに加えて、その親の親がどのような社会的背景で育ったのかも大事な視点。今の子どもの親世代は、高度経済成長期の真っ盛りに育った。その親たちは、敗戦前後の混乱期に育ち、大人として高度経済成長を支えてきた世代。その中で、子どもに対しても一面的であったり、子どもの気持ちをとらえるゆとりもなかつたし、対応できなかつたのかもしれない。

※管理社会の効果は経済成長にあったかもしれないが、それによって失われた部分も大きい。自由に考えたり、言ったりすることを制限してしまった。すべてが細かく決められているので、自分で自由に考えることが不必要。経済成長期には目標があったが、今となると、これからどうしたらよいのかも見えない。そんな歪みが子どもたちに現れている。

※少年法の改正の動きについて、大人社会の縮図が少年問題に現れているのであり、少年法を改正するという問題ではない。全く子どもの見えない人々の論議で、改正しようとする人々にとって、非行少年とはどのような子どもなのか。

※かって、非行の原因についても、貧しく食えないから盗むとか、寝場所がないから侵入す

るといった明解な理由があった。今もいるが、そうしたストレートな形が少なくなり生きてもしょうがないといった気持ちがある。彼らに向かって、希望を持って何かやれと言っても、入っていかない。厳罰にするといったところで解決できない。

※言葉のコミュニケーションができない子どもに対して、できることは耳を傾けることだけ。少ない言葉から、言いたいことを汲み取ろうとする努力。

※大人が何を考えているかを、きちんと子どもに伝えることが大事。頑固親父になる前にきちんと子どもの言いたいことに耳を傾けることが必要。

※専門家が曲者で、資格があって資格のない人にはできないという意味の専門家であってはならない。その意味で医者とは違う。しかし、専門家のところに行けばなんとかなると思っている。これは危険な考え方。いろいろな人の意見を聞きながら、いろいろな人に協力を求められるのが、この分野の専門家。

※子どもの権利について、子どもの要求を相手に伝えて、受け入れてもらう権利ではなく者の道理というか正しい道が通るようにすること。物の道理に合った生き方を保証すること。

※青少年問題は、まさしく大人の問題である。

第13回 E G (1939) 家裁調査官

(最近の子どもたちの状況について)

家裁にくるような子どもに限って見ると、おとなしくなっている。出頭率も高い。逆に言うと、何の考えも無しに呼ばれたから来てるだけ。ただ座っているだけ。その意味で、おとなしさが気になる。行けばいいという感覚だけ、家裁に行って、話をして、それで終わりだから、めんどくさいけどいきゃあいいと言う感じ。

(『援助交際』について)

『援助交際』がらみの子どもは家裁に来ない。売春したものは、基本的に取り締まらないから。シンナー等別の問題と一緒にくると家裁にくる。ここにくる子どもは、世渡りが不器用。うまく立ち回れない。うまく立ち回れるのも、それなりの能力だと思うが、ここにはこない。『援助交際』して、利益をあげるような子どもは多分こない。利用されて、性の対象にされ弄ばれた子どもの比率が高い。

自分を大切に出来ない過去の歴史がある。貞操観念についても、自分自身をそれほど価値づけていない。

(『援助交際』の相手をする大人について)

需要があるから供給する。大人の本音と建前がくっきりと使い分けられている。建前ではいけないとマスコミでも言うが、子どもたちは裏の顔を見抜いている。

(男女平等について)

家裁に来る男の子は、差別されているという感じを持っている。自分だけが悪者扱いされて

きた。女の子には感じない。

(学校について)

担任から、子どもについて本音を聞き出すのが難しくなった。常に、校長・教頭等が同席している。教師が管理されている。情報開示や人権問題と関連している。

教師は子どもにかかりっきりになれない。家裁にくるような子は学校に行かない(怠学)。学校の方も、無理して来させるよりも、来ないほうが楽。子どもの存在が薄くなっている。

教師に限らず、大人は、思い切ったことができなくなった。自分のスタンスがなく、サラリーマン化してきた。生きるモデルとしての役割を示せない。

(家庭について)

親の主觀では一生懸命だが、客觀的にはそうでない。主觀と客觀的評価に大きなギャップがある。親自身の能力に制約がある。知的にも経済的にも。親は一生懸命だけど、子どもにもどうしたらよいか分からぬ。親の努力が空回りしている。

※高校生ブランド意識について、短絡的に若さが高く売れると考えている。先が見えることも関係ある。高校卒業すれば、変化が望めない。それまでは可能性も期待できる。職業的にも限られてしまう。結果をすぐにお金に求める。

第14回 F J (1956) 中学教員

(中高生の問題について)

高校生に『援助交際』について面接した時に「相手のこと」を聞いたら、「馬鹿にしている」と言う。大人を権威として捉えていない。中年に対する大人觀が崩壊している。思春期には権威に反抗するが必要だが、それが崩壊すると子どもは不安になる。頼りたいのにたよれない。一皮剥けば女に牙を向け、金で買う情けない大人の面があるという知識を持つ。大人に対する猜疑心に繋がる。

(『援助交際』について)

日常的なことを破るのが面白いからと、つまらない規則を破っていると、周囲から浮いてしまう。その結果、みんながやらないことに手を染めていくようになる。大人は元々信用できない。楽しくつるんでいた仲間からも相手にされなくなる。そうすると、学校以外の世界に目が向いてしまう。とりあえずお金になることに。それが『援助交際』。

校外の似たような仲間を見つけようとする。何とかしようと声をかけても、始めから拒否されているので、声をかける術がない。

(『援助交際』の相手をする大人について)

情けない。誇りはないのかという気持ち。大人としての役割を放棄して、セックスの対象に

するのは、誇りを持てない人。

(男女平等について)

学校の中では女子が強くなっている。生徒会長も女子。女子が自信を持つことは良いことだが、逆に男子が幼稚化している。かっては、男子がある地位に就いて、女子からももちはやされ、自信や誇りを持ち成長したが、女子がポストに就くようになり男子にチャンスがなくなり幼稚化した。

女性は、家庭の事情で管理職を自ら選ばないだけで、条件が整えば増える。今は、女性だから管理職になるなと言う夫や両親が多い。加えて、子育ても大きい。

仕事をこなす能力は互角。子どもとのかかわりで、しつこい面があるが、事務処理能力は変わらない。

男性は腕力があり力で押さえがちだが、女性は最初から力に頼らない。子どもより力があるうちはいいが、集団を組んだりして力が逆転すると、事件になる。時には、目の前で悪いこととしても注意できなく、引いてしまう。女性は、泣きながらでも止めようとする。

(学校について)

子どもが好きなことが教師の必要条件と思うが、満たしていない教師がいる。子どもが好きだから教えたい、という気持ちが薄らいで、教師の方も自信をなくしている。

子どもにとって、部活の魅力は大きい。楽しみの半分以上の場合もある。教科の先生にはなんとも感じないが、部活の監督は尊敬する。それにもかかわらず、教育課程の中で部活が認知されていない。体罰についても、両者の人間関係が問題。一方的に愛のムチだといっても通じない。

教師になってから育つ場や育てる人が減っている。PTAも教師を育てようとしていた。

(家庭について)

親が幼稚化している。父親は学校に来ないので見えないが、母親の幼稚化が目につく。問題を起こす親と話すと、この親にしてという感じがする。子どものことよりも、自分の人生を楽しむことが中心。こうした子どもは、大人に不信感を抱く。この子をかわいいと思ったことが無いということを、平気で言う母親。子どもが投げやりになんでも無理ない。逆に、親が妙に物分かりがよくなってしまった。本当に子どもを理解するのではなく。

中学では、親同士のネットワークがなく、つまらないことを独りで悩んでいる。

※教師の生徒に対する性的行為について、自分も男だから、かわいいと思い最悪したくなる子はいる。自分との相性もある。それは自然だと思うが、猥褻行為にまで走るのは、自然を逸脱している。

※子どもに対するモデルとは、コピーの対象になるモデルではない。乗り越える対象となるような存在。

※カラオケに大人も子どもも一緒に行く、ゲームも子どもと一緒に大人もやる。大人が子どもに近寄りすぎて、子どもにすれば、大人に対する憧れとか大人になったらできるというものが、少なくなってしまった。

(中高生の問題について)

そんなに悲観するような状況ではない。昔からあった餓鬼大将とかいじめとか、今まで気がつかなかつた所に、マスコミが焦点を当てすぎている。

(若者の服装等について)

女の子の崩れた感じが目立つ。お化粧してると、一人前の大人に見えたりする。そういう子が、クラブ等に入りしてて、お店に来ませんかと誘ったりするんですよ。呼びこみをしてるような子もいる。やめた方がいいんじゃないかなと思います。

(『援助交際』について)

若くして大人の世界に足を突っ込んでる感じがして、大丈夫かなという感じがするんですけど。ちょっと危ないなあと思います。娘がそんなことしてたら、ぶったたいて連れ戻す。本当は注意した方が良いんですけど。

他の人もやってるという情報が入ってくるから、やってみたいという好奇心と、他の人もやってるからそんなに悪いことじゃないという意識があるんじゃないかなと思います。それと、社会が認めて助長するようなシステムを作ってる。

(『援助交際』の相手をする大人について)

何なんだと思う。子供たちにお金をあげて、自分の欲求を満たしてるんですね。東京都の条例化について、各都道府県や自治体がそういうものを作って取り締まっていこうというのは、ひとつの進歩だと思います。

(メディアについて)

取材に仕方や焦点の当て方が、歪んでる。それが社会を歪める。

(男女平等について)

性格では、男女に違いは感じない。

女子隊員が入ることのメリットは、男子隊員が生き生きとする。デメリットは、結婚して産休とったり、育児で時間になるとすぐに帰り、戦力ダウンする。限られた割合しかいないので、わがままというか、気持ちをつかんで仕事に専念させるのが難しい。怒っていう事を聞かせるっていうのが難しいところがあるんですよ。生理とかで精神が不安定なときがあるので、御しにくい。

直属の上司が女性であることへの抵抗感はあると思うが、顕在化していない。階級社会ですから、性別にこだわらず、命令は聞かなきゃいけない。

(中高生の問題について)

今の子どもは、我々の頃と少し違う。先生に反発を感じたけど、当然のことと受け止めていた。今は、大人が先生を見るように、同等に見ている。「キレる」といったことも、無かった。ストレスの多いところで育っているせいかもしれません。アレルギーやアトピーや喘息のように、環境による病気が蔓延している。

地声で話す子どもが多く、傍若無人に思えることもある。アメリカスタイルかも知れない。

(若者の服装等について)

違和感はあるが、流行に影響されるのは普通だろうと思う。どの世代も同じ。ピアスは、違和感というよりも、日本人じゃないような気がする。子供にはさせない。娘にも。

(『援助交際』について)

とんでもない事だとしか言いようがない。いわゆるコギャルと呼ばれる感じの子たちが、たむろして指を2、3本出してのを見たことがある。値段の交渉をしているらしい。暗澹たる気持ちになる。

(『援助交際』の相手をする大人について)

腹が立ちます。上半身と下半身は人格が別だということを容認しようとする風潮がある。男は本能的にそういう風にできるものという気もするが、ある程度の年齢を重ねたり経験を重ねたりした大人であれば、律すべき。ましてや自分の子供と同じか、下の子供を相手にするということは、理性で判断するというより以前の問題。

そうした場が提供され過ぎている。男の本能みたいなものをうまく利用して金儲けをする輩がいっぱい増えてる。

(男女平等について)

性別に関係無く、できる仕事は男女平等でいい。男の方が向いてる事があれば男がやればいい。最近、女性のタブーが、だんだん無くなりつつある。それは構わないが、家庭を営む場合、男と女で分担した方がうまくいく。分担の仕方、責任の持ち方で男と女は違う。女人の考え方方が自由になって、タブーから解放されることは問題ないと思いますけどね。

育児に際して、男の子には男の子らしく厳しくしつけ、女の子は優しくしようと最初から思ってた。息子には、自分で決めた事はきちんとやる、めそめそ泣かない。娘には、あれはだめとかこれはだめとか、言わないようにした。これは母親の役割。

娘は、母親のように仕事を持続したいと思っているが、彼女の思いどおりになるように応援したい。

(学校について)

教師は聖職者という意識をもつ必要がある。体罰も時に必要になる。ただ、学校を卒業してすぐに学校の先生になっても、大人になりきれない子どもがという感じがする。一度社会に

出てから教職に就けるシステムができれば、是正されるのかもしれない。

(家庭について)

父親の子どもに対するかかわりが少なくなった。父親の権威とか家庭のバランスが示せるような家庭の行事もなくなってきた。家を代表するのは父親で、家の中をこまごまと管理するのは母親。全てを半分ずつやる夫婦もいるが、私は絶対にできません。

親は、子どもに対して、親として言うべき義務があり、何でもOKすべきではない。この点が最近あいまいになり、叱ったりしない親が多い。大人たちに自信が無いのかもしれない。叱ることは、エネルギーを使う必要とする。そんなエネルギーを使うのは面倒で、使いたくないと感じ。

親がその親からしつけをされてないので、幼稚化し、基本的なしつけができていない。

第17回 U E (1944) 会社役員

(若者の服装等について)

金髪やスカートを短くしたり、流行を追っている。流行を追うことは、人の目を気にしているわけだから、自分の存在をアピールしていることになるが、大人とは関わりたくないのではないか。若者は流行を追うものなのかもしれないが、自分の若い頃とは違う。

男の子でもピアスをして自分を飾り立てるのは昔はなかった。

彼らが人の上に立つようになった時、どのように自分を変えていくのか気にかかる。お手本にならなければならないから。

(『援助交際』について)

結局、おしゃれやブランド物の購入のためのお金が必要なんですね。高校生という立場でお金を得ようと思えば、そういう所から得るのが一番早いということなんでしょうね。そこには大人が一枚かんでる。

『援助交際』に走るかどうかは、教育。学校の教育、家庭の教育、あるいは哲学と言ってもいい。本来の人間の取るべき行動や取るべきでない行動というもの。

(『援助交際』の相手をする大人について)

自分の娘の問題になれば立腹するが、他人の子だと自分がエンジョイする対象として見てしまうという部分が、情けない現象だなと思う。

正直に言って、僕の中にもそういう気持ちがゼロではない。チャンスがあれば、やってたかもしれない。チャンスがなかったし、してはいけないという自制心もあって、積極的には動かなかった。積極的に動けば、チャンスをつかんだかもしれないし、つかみ得たとも思う。自制心が働かないのは基本的に年齢が若いからかと思うが、そういうものを求めるはある意味では本能的なもの。避けられない部分というか、永遠の課題。

(学校について)

個々の家庭の事情は千差万別ですから、大量生産のように型にはめようとすれば、おかしな所が出てくる。戦後一貫して、マスプロ的な教育だった。1人1人に、手作りの教育を実施すべき。そういう環境を整えるのが国の仕事。

(家庭について)

少子化の原因の1つに、親のわがままがある。豊かな生活をエンジョイするため、子供は1人でいいという親のエゴが少子化に拍車をかけた。豊かな生活の底辺に流れるのは、お金。共働きもある意味でお金。そういう底辺に流れるものが、家庭での教育に影響を与えている気がする。

親と子のズレはいつの時代にもあった。会社を重視しているのも、家族のためになってるという自負があり、そういう親父の背中を見て子供は育ってきた。それが子供にとって良いことか悪いことかというのは考えてなかった。今の若い人は、仕事よりも家族を優先するようになった。それはそれで良いこと。会社としても、忙しいときに休まれると困るが、年間を通じて急ぎの仕事というのはそんなに多くない。日頃から休める日を上手に作るような仕事振りをしてもらった方がありがたい。リフレッシュして次の仕事をしてもらった方が、トータルで見たら会社としては助かります。

会社の仕事が忙しいときには会社に行ってばかりいるかもしれないけども、仕事の暇なときは子供の遊び相手になってあげるというメリハリを、いい意味で子供が感じることができるのであれば、良いことだと思う。

子どもに学校を休ませ、家族で旅行に行く人が増えている。今の若い人は、子供の数は少ないけども、家族を大切にし始めてるような気がします。それは良いこと。

※我々の若いときはAだとかBだとかCだとか、男と女のことをひやひやしながら話した。今は、テレビ等で見ると、あっけらかんとしている。セックスに対するものが非常におおっぴらになっている。処女性を大切にし、自分の子供にも求めたがる年齢ですが、子どもはそういう考えは受け入れない。

※成人式などについて、市なり地方公共団体が選挙活動に使ってる。それは先生方の思惑であり、新しく成人を迎えた方には関係の無いこと。そういう延長線上で、講師の話しを聞いてもあまりありがたくない。ただ、若い人という是有る意味で一番強いので、弱い人の味方になって欲しいと思う。

第18回 C H (1958) 小学校教員

(中高生の問題について)

昔に比べて、大きく変わったという実感はない。

(若者の服装等について)

ルーズソックスにしても、好きか嫌いかというのは個人差がある。自分は好きではないが、だからということはない。校則に反抗する子は、昔からいた。

男の子のピアスは、個人的には嫌。身体に穴開けるというところに、心理的な抵抗がある。娘も未成年の間は駄目。大人になったら、自分の責任。

(『援助交際』について)

身近な中高生で、聞いたことはない。マスコミでは、みんながやっているかのように言われているけど。中学校の娘に聞いても、そんなことはないと言う。

(『援助交際』の相手をする大人について)

一番の責任者は買う方。需要があり供給があるのであるから。どちらが先かはわからないが、少なくとも買う人がいるから、売るという行為が成り立つ。完全に大人の男の問題。女子高校生の性道徳が乱れてると大人の男が批判する場合に、大人の男の責任を意識せず、未成年の女の性を買ってるとということの責任をとらないで、そういうことを言うのが結構いる。

男がお金出し性を買うのは昔からあった。私は基本的に反対だけど、世界中見ると、売春がない国は多分ない。存在してしまってるという現実は仕方ないとは思う、日本が異常だなと思うのは、センセーショナルにあたり立てていること。外国では、少なくとも子どもに対して、触れてはならないと注意する。日本では、センセーショナルにあたり立て、なんでもお金のネタにしてしまい、無責任にやりすぎている。

子どもの成長に良くないものから子どもを守るのが、子どもの人権を守ること。しかし、人権が大人にとっての人権で、責任を伴わず歪んでいる。

(メディアについて)

週刊誌なんかに腹立つのは、女子高生のそういう風俗とかをおもしろおかしくはやし立て、買う側を奨励するという記事。男社会が一番悪い。それを商売にしてるマスコミには、一番憤りを覚える。売れれば何でもいい、儲かれば何でもいいという風潮。社会的に禁止するのは難しいかもしれないが、そういうものを認めてしまう社会の弱い部分っていうのを感じる。

(男女平等について)

不平等はだいぶ薄れてきたけど、まだ完全な平等じゃない。前に比べて、男だから女だからという意識は、薄れてきている。しかし、女はこうあるべきとか、男はこうあるべきといった社会的意識はある。家庭でお父さんとお母さんが、全く同じように家事を分担していることは多分ない。夫婦がフルタイムで働いていても、完全に平等に分担がされていることもない。そんな雰囲気の中で、子どもも影響は受けている。しかし、それが学校で形として出てくることは滅多にない。

子どもには、男だから、女だからということではなくて、自分自分の人生だから、自分の人生としてやろうと思うことをやれるように、助けていくしかない。

(学校について)

学校でも子どもの人権が強調されるようになったが、子どもの人権を尊重することは指導し

ないことだと。子どもをほったらかせよと。問題行動があっても、手を出すとなる。子どもがつけあがるだけ。権利と義務、自由と責任は表裏一体。表現の自由が尊重されるためには、子どもや弱いものの権利を守らねばならないという権利も存在する。そのへんが非常にアンバランス。

(家庭について)

父親の存在を感じることが少なくなった。特に、サラリーマン家庭で。親に非常識な人が増えた。親同士で揉めることも増えた。自分の行動だけしか、目に入っていない。自分の子どもの言うことだけしか聞かないで、一方的に感情をあらわにする人、我が子に何かがあったときに冷静さを失ってしまう人が増えている。こうした親の態度の影響か、中学年になっても、自己中心的で自分勝手が残っている。

※昔の教師は、子どもをきちんとさせることを要求された。子どもがきちんと規律正しくやることが、教育の成果だった。怒鳴ったり、時に体罰を与えたりもあった。それができないと、指導が生ぬるいとも言われた。しかし、性格的にも自分には出来ず、何か違うと思いつつも、自分に力がないのではという気持ちがあった。その後、体罰が問題になり、いけないことが明らかになると、そういう指導が要求されなくなった。その点では、やりやすくなった。押しつける指導ではなく、待つことができるようになった。

第19回 K I (1961) 高校教員

(中高生の問題について)

大事にされてきているのか自己中心的な子が多く、我慢ができず頑張ってなにかを成し遂げようという子が少ない。怒られ慣れてないので、指導されたり注意されると直ぐ反発したり、反抗的になる。男子は厳しくやれば言うこと聞くが、女子は非常に難しい。男子は、力関係で言うことを聞く聞かないを決める子が多い。女子は、話してもわからない、厳しくやってもわからない。真面目な子は別として、援助交際も含め、自分に価値があると考えている。主張はするが、いいつけは守れない。注意されれば反抗的になる。

(若者の服装等について)

ルーズソックス、ピアス、男子のロング等は、個人的には許し難い。ある程度、学校の決まりで守らせなければいけない。

(『援助交際』について)

援助交際してると分からぬが、一応の身だしなみをし、日焼けサロンにいって、きれいにして、放課後は繁華街をうろついてというのを見ると、自分たちはブランドだという意識をもってやっているなと思う。性行動が若年化しているのに、性に関する知識が伴わないままセックスに走る子が多い。

(『援助交際』の相手をする大人について)

毎日女子高生を相手にしており麻痺している。教員以外のものからうらやましがられる。世間一般には、女子高生とセックスまでいかなくても、一緒にご飯食べたい、話してみたいという欲望を持っている人が多いと思う。若いとか、かわいいというイメージが、男の本能的な部分をくすぐっている面もある。異性接触欲望、性に対する欲求は、男子の方が強い。風俗業界等、ほとんどが男の人対象。性欲のメカニズムが違うので、そういう産業も発達しているし、女子高生が金になるという風潮もでてくる。女子高生と近づきになりたいと思っている人が多い。話をするだけで気分が若返るのでしょうかね。

(男女平等について)

社会的には平等に扱うべきだが、男女で区別をしなければならない面はある。混合名簿を導入することが男女差別をなくす第一歩だと主張される方もいるが、体育や健康診断を考えれば、別にした方が便利。利便性で分けているだけで、女子男子の順でも別に構わない。そこをはき違えて主張している方が多い。私自身は、学校の中でも、特に男子女子で差別をしていない。区別はあるけれども、絶対差別はしないと話している。

(メディアについて)

偏った報道をやめて、あんまり高校生をとりあげないようにしてほしい。真面目に努力している高校生にとって失礼。渋谷で歩いている高校生だけを見て言うのは偏っている。

(学校について)

公立は甘い。公教育の難しさを感じる。公立高校の場合、親から「なんでだめなんだ」とグレームがくる。問題行動を起こして、保護者呼び出ししても、何が悪いんだと言わんばかりの保護者がいる。学校としても、親を懲戒処分にかけるわけにはいかない。よその子を預かっているという限界があり、厳しくしなければということをきかない子もいる。体罰についても、絶対に先生は手を挙げないことがわかっているので、挑発してくる場合もある。システムが成り立たないここまで来ている。子どもの権利ばかり大事にしすぎて。必要なことをやれば卒業させるけれども、やらなければ卒業できないというように、ドライに割り切っていかないという面もある。個性を重視し過ぎ、好きなことを好きなだけやりなさいと育ててるので、一斉教授型の授業が成立しない。高校は進学主体の指導要領になっている。

(家庭について)

家庭でのしつけや雰囲気が大きな影響をもつ。家庭環境を見てかわいそうな子どもがいる。小さい頃から、あっちぶつけ、こっちぶつけでくれば、いろいろ歪んでしまうのもしょうがないというケースもある。

※精神年齢的にも男子の方が幼い。女子のほうが積極的。男並の言葉使い。好きな人ができると、女の子の方からもアタックする。新人類をとおりこして、宇宙人的なところもあり、年輩の先生はだいぶ苦労されている。

※集団を作るのが下手。自分から友達のネットワークを広げていくのが下手。ネットワークに傷が付いた時、修復することができない。群れているのも、一人では心細いという面もあるだろうし、群れている間に強い友情は見られない。

第20回 M Y (1959) 高校教員

(中高生の問題について)

一生懸命やってる子どもたちはたくさんいるが、目標の持てない子たちもいる。自分の弱いところを追求されたり、触られたくないところを触られた時の反応の仕方が、慣れてない。喧嘩でも、どこまですると、どういう大けがをするかがある程度わかっていた。今の高校生は、こういうふうにすると、こうなるという経験がないから、際限なくやってしまう。人間との接し方が下手。人に意見を言う時も、相手がどう感じるかが分からず人間関係を壊してしまうことがある。瞬間に思ったことを、口に出してしまう。グループから外されることに敏感で、くっついている。自分の居場所がない。

(『援助交際』について)

一部の子だと思う。悪い子、いい子という区別でなく、興味があつて進んでいく。彼女たちをブランド化してる社会もある。軽い気持ちで、少しぐらい一緒にいることでお金を貰えるなら、いいやと。その先の汚い部分をスタートにしてしまう。一度、汚いところに漬かると、もういいやっていうような感じがある。相手が無責任な男女関係を求めてているのに、会いに行っちゃう。

(『援助交際』の相手をする大人について)

家庭の温かさ、体温を感じられない子どもたちが、父親を求めるような形でやってる部分もあるかもしれないし、ただ単にお金が欲しいという場合もある。そういうマイナスを判断すべき世代が判断しないということに対して、怒りを感じる。自分も、性的な欲求を持っていることを否定はしないが、高校生は判断力がまだ無い。そういう子どもたちに対して、自分のためだけの判断を押しつけてしまうということは、許せない。

行政が条例を作り禁止することは賛成。今の段階では、抑制しない限りは難しい。判断力のある大人が抑制できなければ、規制を作る必要がある。

(男女平等について)

男性と女性は違うはずなのに、同じ条件にすることを男女平等と言うのは、平等ではない。性差はあるはずだから、性差をお互いが尊重しあって、仕事の中でも条件を作り役割分担していくのが平等。今は、女性が男性化しようとするのを認めるのが平等。それは誤り。どんなに男性教員が生徒指導しても限界がある。女の子の気持ちはつかめない。年齢差、経験差、人間性と共に性差があり、その性差を考えるのが大事。

母性には勝てない。絶対的な愛情という点では、母親が強い。男は理屈を越えるのが難しい。

女の人の場合、それでもあなたは私の子なんだと。子どもにとってはそれはすごく大事。最後の最後に、誰が見放しても、もう、親だけは私を、最後、守ってくれるっていう。

(学校について)

どんなに教師として近づこうとしても、大人である限り、距離はある。子どもたちの中に入っていく、仲の良い先生だ、友達のような先生だと言われること自体が、マイナスな部分がある。真剣に接した時、どう対応できるのかなと考え込んでしまう。子どもたちが悪いことをして見逃してしまうと、その先が怖い。あの先生は許してくれたから、いいんだという判断をしてしまう。意識的に駄目なものは駄目だと言う必要がある。

(家庭について)

父親不在的なところは多い。社会全体に絶対的尊敬できるものがない。暴力的であろうと、力尽くであろうと、自分を抑えてくれる人もいないわけですね。暴力が良いとは言わないが絶対的に自分の気持ちを理屈でなく抑えてくれる存在がないの。乗りこえるというエネルギーを、作り得ない。子どもに受けようしたり、仲間になろうとして、自分という人間を忘れてしまう。子供と一緒にいる時間が長くなった。家庭では親という立場でなければならぬのに、友達的な立場に自分を置こうとする。現象的に幼い。

父親は存在しているが、父権的な父親がいない。

※行動や服装だけを見て判断してしまう。自分に見せている面だけを見て悪いと判断してしまう。ところがその子は実はすごく良い子で、違う面も持っていることもある。それを意識しないといけない。外見と学力とかでは、わからないなという気がします。

※ポルノグラフィが巷に満ちあふれ過ぎている。規制は必要。あたかも現実であると勘違いしやすい記述がずいぶん多い。

第21回 FU (1956) 会社員

(中高生の問題について)

親が非常に教育熱心と言われるが、本当の意味での教育熱心かどうか別。学業での教育熱心さが強過ぎ、心の教育が欠けている。子どもたちが萎縮して、逃げ場がない。

(若者の服装等について)

全て否定する必要はない。ただ、やらないと仲間外れにされるかもしれない。ピアスも、風潮として、認めざるをえない。自分の子どもたちには、止めさせたい。大人になって、時代の流れになればやむをえない。

(『援助交際』について)

夜遅くに、女子高生が制服で帰宅しているのは信じられない。親がしっかり子どもを見れば

と思う。家で相手にされないと、友達と夜に出歩いてしまう。いきつくところに行ってしまうかもしれない。かわいそうな境遇に追い込まれている子どもたちもいるかもしれないが、一般の中学や高校生の半分以上ということはない。そんな風潮を煽り過ぎている。

(『援助交際』の相手をする大人について)

自分の周囲には、そういう人が見当たらない。ごく限られた不良な人たちだと思う。誇張され過ぎ。

(男女平等について)

女性が働く職域は、まだまだ残っている。まだ女性の力を上手くいかせていない。社会に進出してもらいたい部分もあるし、女性のきめこまかさ、緻密さが、男性より有効に働く部分が多くある。ただ、子孫を繁栄させるという大変な苦労があるから、それをカバーする男性の立場なり、産休、育児休暇という社会的な制度が必要。しかし、全部勝ち取って、さらに何かを勝ち取るべきというのは嫌い。男女は持ちつ持たれつ。だが昔の価値観や風習が根深く、一掃するのは大変。男女の関係が熟成すればよい。

お茶を出す場合は、お客様のことを考えると、女性がだした方がしとやかな感じで、雰囲気がいい。女性にしかできない役割もある。それはそれでやってほしい。

(メディアについて)

センセーショナルに書き過ぎている。特殊なことを一般的だと言わんばかり。それに惑わされることもある。夜遅くに制服姿で電車に乗る女子高生見て、何かあると思ってしまう。こうした情報が入っているから。

(学校について)

仲間とスクラム組みながら、子どもの気持ちになってやってほしい。教師のエゴで怒るのは良くない。学校は、学校という枠の中で教科や団体生活の指導をする場。それ以外は、先生の手を離れて行動してしまう。日頃の家庭の教育、しつけが問題となる。

(家庭について)

家庭にはそれぞれのやり方がある。父親は、母親と同じで接し方は物理的に無理。同じ男の立場として、苦しみなり悲しみを共通にわかちあえるようになりたい。

息子には、男の子として骨太であってほしい。娘には、優しい気持ちで接してほしい。

母親が家庭に入ってしまうと、怖いものは無いし、子どもは言うことを聞く、夫を尻にひいていると唯我独尊状態になってしまう。向上心がないと、自分を高めていくのが難しい。大人の中には、子どものしつけより、自分自身のしつけが問題だと思われる人が大勢いる。必ずしも子ども達が悪いんじゃない。しつけは、あいさつをするところに基本がある。

(中高生の問題について)

青年と少年は分けるべきで、青少年問題という言葉は疑問。青年教育と少年教育に分けなければいけない。中高生までは少年、高校3年くらいから青年。青年になると、いたずらして注意すれば、耳を傾ける。高校2年から3年が過渡期で、ぐっと発達する段階。高校2年くらいまでは、肉体的に青年に見えても幼い。

成人式の問題は、今の子供たちを考えると当然。彼らにとっては、ひとつの交流の場で、座ってじっと聞いて、誰かの話を聞けというものではない。成人を祝って赤白のワインを1本ずつあげた方が効果的かも。

(若者の服装等について)

全然抵抗がない。自分も同じ世代だったら、茶髪にしていたかもしれない。話してみると、一人一人は非常に素直。あの年代を見ると、自分の子どもを見ているようで、そんな目で見てやらないとだめになっちゃうなという気持ちがある。

(『援助交際』の相手をする大人について)

大人に相当責任があると共に、中学生や高校生の年代の親の教育の問題。飽食の時代に育った親の世代に問題がある。自分の子どもには厳しくても、他人にはまったく逆。他人のことは考えない。援助交際やっても、「俺の娘がこうだったら」と自分の子どもに置き換えることができない。自分の娘は考えるけれども、他人をそういうものの見方で見れない。受験戦争の影響かもしれない。自分勝手に、人よりもいい学校に行きたいといった。

(男女平等について)

今の社会は男女平等になっていない。同一労働同一賃金だが、管理職は少ない。学校は男女平等教育を推進していると思うが、親がそういう状況だから難しい。共働きが増えているが、「男は外、女は内」が抜けない。理屈的では男女対等と言いながら、実体は差別がある。ただ、動物的な差はあるが、社会的な性差は対等であるべき。ただ、女同士・男同士の恋愛は良い悪い以前に気持ち悪い。あまりにも異常。頭で思うことと、体は別。

男が女らしさの方に近づいている。

(メディアについて)

テレビの影響が強い。アメリカのものまねが多い。しかも部分だけ。例えば、公共の電波で裸をやっちゃいけないとかは取り入れないで、自由だけを取り入れている。そういうものを受け入れているから、お金に走っちゃう。お金第一を含め、いろんな悪いもんが全部、ひとつのマスの中に入っている。

(家庭について)

朝食を必ず子どもと一緒に食べるとか、話す時間が必要。夫婦喧嘩は子どもの前でしてはいけない。口うるさいことは絶対言わない。「俺はおまえたちを注意して見てる」ということ

を言葉には出さなくて示す。親が子どもに求め過ぎ、自分は、平気で無駄をするし、お金を使い過ぎている。

※非行を犯す子どもは、なるべくしてなった訳でない。いろんな環境があって、中学や高校の感受性が強い時に、相当ショックを受けてんじゃないかな。

※塾へ行くのは、勉強していないせいかもしれないが、そういうところに行って、周りを見てないと、不安でしょうがないからかもしれない。自分だけ塾に行かないと、自分がどの位置にいるか分からぬ。そこで塾へ行って、いろんな人を見たり自分をみつめると、安心できる。「赤信号みんなで渡れば怖くない」は、すばらしいとえ。

※行政や大人は、大人の考え方で、大人の鎌型に当てはめようとしている。期待される人間像も、本来は人間観であるべき。期待される人間像は、像という鎌型を当てはめること。

※今の教育の制度をなんとかしないといけない。生まれた時から、末は博士か大臣かと期待をし、幼稚園で振り落とされて、小学校で振り落とされ、高校で振り落とされ、その頂点が大学で、あくまで東京大学。この辺を変えていかないといけない。振り落とされた人間は、自分自身が何をしたらいいか分からなくなっちゃう。

※子どもたちの群れは、歩いてるんじゃなくて徘徊。彼らは、群れから外れたり、のけ者にされることに恐怖感を持っている。周りが悪いことしても、注意はしない。外れるから。

第23回 KN (1955) 小学校教員

(若者の服装等について)

昔も若者は流行を追いかけていた部分もあったが、反体制というか世の中を変えようという社会変革の動機があった。今の彼女たちは、そういうものが全くない。学校の秩序や規則等の学校文化からしても、都合がいい。制服があるから、ルーズソックスがある。自由にして主体的に選ばせねば違うかもしれない。そこが決定的に違う。

最近の若い子は、洗練されて格好いい。制服着ているのを見るとセンスが悪すぎる。両極端というのは日本的だと思う。同じことの両面で、正反対の現われ方をしてるに過ぎない。

(『援助交際』について)

極限状態だと思う。ブランド品や外的なものにこだわるのは、内面を育ててこなかったからだ。自分も物質化社会をエンジョイしてるが、体を売るのはついていけない。需要と供給が合致するから成り立つ。男性の立場からすれば、彼女たちに商品価値があるよう思う。する子としない子の違いは、家族の問題。ただ、操を守らせる文化は、完全に崩れている。今まで厳しく他律的に規制されてきて、それから解き放たれた時、自分の主体的な選択としての行動がとれてない状況。封建文化が崩れた後のあだ花。過渡的だが時間はかかる。

女子高生でも、自己決定して結ばれるのは構わない。自発的のようだが、実は欲望にとりつかれて、それに操作されながら、行動に走るという意味で自由ではない。女の子も、商品価値としてのモノ(体)だけを売っていて、解放されていない。ブランド品を買うために、そ

の時だけ耐えればいい。

(『援助交際』の相手をする大人について)

男が払うこと自体は分かるが、行動するかは別問題。需要と供給が合致すれば、何でも取り引きしていいとは思わない。何万も金を出す男は、どこからそういう金が出てくるのか。払う男がいるから、そこを突いてくる。払う側の方の問題が大きい。するかしないかは、人権思想や差別に対する感覚。性産業を全部否定するわけではないし、自分に経験がない訳ではないが、一線を引く感覚がある。ビデオを見たり、裸の写真とかで、行動原理として一線を引く。それは妻や娘に対する思いと同時に、一個の人間としての生き方の問題。人権感覚思想やポリシーであり、行動の価値基準や行動原理を持ち得てない人。男が女子高生を買う場合は、モノとして扱っている。そこにつける男性の感覚がおかしい。それと人権。

(男女平等について)

男性の基準に近づこうとしているが（喫煙や深夜労働）、人間として見た場合に果たしていいのか疑問。そういう意味でまだ未熟。自立した者同士が結ばれのが理想。しかし、社会は自立を阻んでいる。自分の家でも、家事は妻に偏っている。ただ、相談する時に安心感を与えるのが夫の役割だと思う。

(メディアについて)

女子高生や女子高生の『援助交際』を煽ってる。自分の都合で描いている。

(学校について)

内面を育てるのに、評価の問題も含めて、学校教育は大きい。外面で判断してしまう。外見で不良かどうかは判断できなくなった。何を考え、どう行動するか、どういうポリシーを持っているかを一個の人間として見て、おかしかったから、大人も一個の人間として、おかしいと言えばいい。個人の立場を保証することで、教師も率直に言える。

(家庭について)

親は、自分の子どもに及び腰。自由はいいけど、これだけは許さないと言う必要がある。母親が小学生を連れて、カラオケ等に行き遅くまで飲んで、歌っている。女性の解放として捉えれば、それでいいかもしれないが、何でもありみたい。卒業式等でも、ビデオを撮ろうとして、傍若無人。自分の子どもだけしか、目に入らない。親に社会のルール、モラル、エチケットを守らせる必要がある。基本的なしつけ機能が、親も社会全体も極端に低下している。地域の中で、核家族の母親が孤立している。

※良い学校だから『援助交際』がない訳でも無い。内面を育てず、表面的な「いい子主義」が、学校にも家庭にもある。一定の枠組みの中で納まつていれば良いという風潮。子どもは息苦しさを感じ、精一杯の抵抗や反逆をする。一つの自分探しとして、極端の方向に走ってしまう子もいる。

※子どもたちは、反社会ではなく非社会。世の中を変えるに、ひとつは社会を変えるか、自

分の内面を変えるか。学園紛争の時代は、社会に向いていた。今、社会を変えようという目を持たない。今でも若者は、社会の中でもがいている。結果的に、極端に走り、宗教とかウリに走る。

※小学生を見て、感じのいい子がいるが、いい子として括るのでなく、内面を見なくてはいけない。高学年の女の子ぐらいから、单なるいい子で演技的にやってる子と、自分なりの価値基準がある程度できつつあって、主体的に価値判断できて、意見表明できる力を持っているという子がいる。そういう子は、周りがルーズソックスのように流れていても、動かないと思う。

※小学生は、親がたたき込めば、思い通りになる。マインド・コントロール。小学校の段階では、親の影響は強い。

※コギャルを見てると、結局主体性がないという意味では、制服で、がんじがらめになってる自由のなさっていう点で同じ。日本の社会の根本的なもの。

※内申書の情報開示の問題が、教育の場で先生たちをしり込みさせている。つい、私立中学受験する子には、いいこと書いてしまう。「受験しなかったら、こんなこと書かなかったぞ」って思いながら。でも、子どもや親との関係の問題もあり、基本的にできてないと、及び腰になったり、事勿れ主義なってしまう。明らかに問題行動を起こしたら、それを書かないことは、その子のためにならない。

第24回 NA (1952) 農業

(中高生の問題について)

最近の子どもは、ストレートに口を出すように見える。小学校の低学年から言いたい放題。そのために喧嘩になることもある。自己主張が強い。

(若者の服装等について)

若者が髪の毛を染めることを当たり前という風潮がある。一時の風潮で、しょうがないと、息子に対して妥協している。多少若い時は、生意気だったり、早く大人の格好してみたかったり、流行りものを追い掛けたいという気持ちが、どの時代もある。

男のピアスは、嫌。男のやるものはない。女の子も、中学生や高校生は嫌だが、年頃になれば、絶対駄目だとは言えない。

(『援助交際』について)

世の中が豊かになり、お金があれば何でも買えるようになった。途中の努力や苦労を飛び越えて、安易にお金を得ようとする。精神的な面についても、親が家庭で教えていない。

(『援助交際』の相手をする大人について)

需要と供給の関係。男は、昔から、女性を買うことがあった。人間の性欲は、いくつになっても、どの時代になってもあった。しかし、高校生みたいな子どもを相手にするということ

は、分別のある年齢の人が分別が働くから。

子供がいたずらしても、ニヤニヤしながら、見てるだけの親を見かける。

(男女平等について)

女性でも能力がある人はすばらしい。社会に貢献したり、家庭の主婦にできないことをする女性は、素直に認めなくてはいけない。女性の地位を高めるということではなく。

自分としては、「男は働く、女は家庭を守る」というような考え方方に近い。原則的にそうあるべき。しつけや日常の家事を女性がきちんとやってくれているから、お金を稼ぎ、家族を食わせることを、はりきってはつらつと出来る。

普通に夫が働いていれば、二人で働くなくてもすむ。でも、独身時代にお金を使って外で遊ぶことをしっかりと覚えてる。自分たちも若い一人者の時と同じように、レジャーを楽しもうとか、豊かな生活を楽しもうっていう傾向が強いから、二人で働くようになる。

(学校について)

先生を殴るとか、ましてや刺すなんてのは、言語道断。先生だって、人間だから、無責任なことを言うかもしれない。それを、むかついたら刺しちゃうとか、殴っちゃうとか。きちんと家庭の中で、小さい時から教えなければいけない。それが欠けている。悪いことした方でも、あんたが悪いと裁判沙汰になり、それを裁判所が認めたりする。「優し過ぎる世の中」と思う。

(家庭について)

核家族で子供が少なく、大事に育て、何でもありという風潮。大人が子どもに優し過ぎる。きちんと挨拶できることが基本。小さい子をカラオケ等にも連れてくる。子どもは、自ずと夜の遅い時間の生活や、夜遅くまでそういう場所で遊ぶことを体験で覚え、大きくなった時に、違和感なく、受け入れるようなる。携帯電話等、親の眼が届かないものが作られた。

第25回 I S (1955) 会社員

(若者の服装等について)

スタイルが変わっただけ。ただ、外側だけで、ファッション雑誌や流行に遅れないようにという意識が強い。ルーズソックスも制服だから奇抜に見える。公立高校だと、自由な雰囲気を感じる。

(『援助交際』について)

クラブ活動や自分の趣味があるものは、そういうのに走る割合は少ない。時間がないから。それが、学校行って帰ってくるだけだと、勉強をよくする子以外は、時間がある。それを埋めるのに、友達同士集まって、遊びに行ったりするようになる。洋服とともに、争うように身につけたくなる。

(『援助交際』の相手をする大人について)

普通の神経がずれている。私服を着ていると、高校生かどうかわからないこともある。基本的にさびしい人。

(男女平等について)

決して平等とは思わない。数的にはある程度平等かもしれないが、警察署長とかに女性がならなければ。女性が仕事を続けられるような状況になっているか疑問。普通に仕事をして、子どもを預けられるシステムが当たり前になれば。今は、家事と両方は難しい。男性がカバーしないといけない。やはり女性に家事をやってもらわないと。

(メディアについて)

雑誌とかに、いかがわしいのが多く掲載されているのも、読む人がいるから。カタログなども、ものを煽っている。

(学校について)

いじめに対する教師の対応に納得できないものがある。昔は、先生に任せられた。一人の教師が35人の子どもの面倒を見ることは無理。子どもも先生の言うことを聞かない。昔のように、先生は体罰を使えないし、子どもも自己主張するから。体罰そのものは良くないが、それ以外で子どもの面倒を見れば「良い先生」となつくこともあった。

(家庭について)

親が先生の品定めを子どもの前でする。親が、子どもの方に歩みよって、友達感覚になり、上下関係がなくなった。子どもも、そういうことを見抜いている。

※地味な仕事をコツコツすることは、好きでなくなった。

※若い頃は、物欲が強い。周囲にものがあふれているので、我慢しなくてもよい。今の、ブランド志向は、物そのものに対する欲求とは別。

第26回 S E (1947) 会社員

(中高校生の問題について)

いい意味で環境に恵まれて、ベースが高い。豊かな時代にあるから。いじめ等、限度を知らないものがあり、理解できない。昔は、暗さはなかった。いじめられる人がいれば、助ける人が必ずいた。いじめる方も、限度を知ってるから、あるところでやめる。今は、暗い方に走ってしまう。

(若者の服装等について)

自分をアピールしたり、誇示する方法。一種の自己主張。世の中も、自分を主張しなければ

だめという風潮。先生は集団でうまくやろうとするから、失敗する。そういう時代がもう終わって、奇抜な格好して目立とうということは当然。そんな悪いことではない。男性のピアスも、別に問題ではない。会社にそういう子が来たら、困るけど。子どもがしたいと言ったら、議論する。

(『援助交際』について)

女子が性を前面に出したり、女であるということを前に押し出すような子が多い。援助交際も、女だから出来る。女の子は、男が使う暴力の代わりに、陰険になっていく。自分が表に立ってボスになるのを隠そうとする。女性の方が、キツネ的にこすい。

貧乏とか困ってとかではなく、ベースが非常に高い。昔は、欲しい物が買えないと、盗むなり、他人に強要するなり、物で要求した。今は、お金。自分でお金を出して買う。物そのものというよりも、物の種類が多くなり、いろいろの種類を手に入れたい。そのためには、お金が必要になる。対象が物というより、流行を追いたい気持ち。その中にブランドがある。

(『援助交際』の相手をする大人について)

自分は、面倒くさいからしない。援助交際の団体があるわけでもなく、裏に隠れたもの。それをするためにには、分の意思がないと。そうした意思を持つのは、めんどくさい。自分の娘みたいな子に、何万円も出すのか理解できない。性の捌け口を求めようとするのは、おじさんの心理。昔はお金で捌け口を求める場所があったが、今は援助交際でお金を使う。

昔は友達や先輩に連れて行かれた。お互いに同意を得てやった。今は、お互いの合意点っていうのは、援助交際をやる側、申し込む側は孤独ですよね。昔は第三者に話せたが、今は絶対に秘密。集団の付き合いが希薄化しているのかも。

(家庭について)

最近は、家族同士で飲み屋に来る。親同士で飲んで、子どもは子ども同士で。子どもが騒いでも、親はすいませんとは言わない。親の都合で、子どもは無視されてる。子どもは、そうなると勝手な子どもになる。

第27回 IN (1948) 会社役員

(中高生の問題について)

自分の価値観が正しいかどうか、ぐらついている。悪いことしても、注意しない大人が悪いというのが、今の若者の典型的な発言形態。その裏に、「親だって、たいしたことやってない」という意味合いを感じ取れる。若者に問題があるとすれば、先生や親が、きっちりとした見本を見せないから。中学生だけに言ってもだめ。授業参観の時も、親が後ろでしゃべっている。その子供たちだから、さもありなんと思う。子どもだけの責任ではない。

(若者の服装等について)

男性のピアスは、特に嫌。自分の子どもだったら、止めろって戦う。女だったら、許せる。なぜかと言わいたら、難しい。茶髪は、相対的に受け入れられる。周りに多くなれば、自然に慣れる。短いスカートは、テレビ等で、すぐに裸になったりするから、それに比べて、そんなに気にならない。麻痺してきたかもしれない。

(『援助交際』について)

常識では明らかにおかしいけれど、なぜいけないかを論理的に言えない。お金のためにもあるが、少なくとも合意してるわけだから。イエスかノーと言われば、ノー。しかし、論理的に説得するのは難しく、感覚的。親が嫌がることはやめろという叫びでしかない。

自分の娘だったら、なんとしてでも説得する。第三者の一般的な高校生、中学生に、客観的に分かるように言うにはどうしたらいいのか分からぬ。

売春という認識をしていない。援助交際という、遊び的な言葉が流行した。おじさんに対する援助をしてると。マスコミも売春という言葉を明確に使えば、ブレーキになりうる。中性化した言葉で、ごまかしている。援交だと便利に使われ過ぎている。それに乗っかって、援交で売春ではないと、かくれみのにしている。

(『援助交際』の相手をする大人について)

起こりうるだらうと思う。世界中にそういう場所が必ずある。男の問題として、否定できない事実。ただ、プロフェッショナルとしてやってると、女子高校生がやってるという大きな差はある。たまたま日本では、プロの女性が法的に存在できないようになったために、素人の人が出てきてしまったのかもしれない。

(男女平等について)

個人的には、男尊女卑の考え方がある。そういう意味で、おもしろくない。論理的には、平等だから権利や義務だって平等。今の動きは、正しいと思う。敢えて沈黙してるだけで、腹の中では「コンチキショウ」と思う。「冗談じゃねえ」って。

面接などで女の子の方が優秀。理路整然で、夢もあり言葉もすばらしいし、語彙も多い。男の方が元気ない。セクハラも、コミュニケーション取れれば、セクハラにならないで、受け入れてくれる。それがないと、ちょっとしたことで、傷ついたり、傷つけあったする。

(学校について)

先生から変わらなくてはだめ。先生が生き生きしているところを見本に見せないで、生徒がどうして、生き生きできるのか。先生が幸せそうな顔をしてなくて、なんで生徒に幸せになれと要求できるのか。核となる教えを、戦後、放棄してしまった。代わりに、民主主義や自由という思想が入り込んだ。それ自体はいいことだろうが。人生の先輩に敬意を払うという核を失ってしまった。自由と義務はセット。個人と社会もセット。そのバランスが置き去りにされて、個性や自由や民主主義といった抽象的な美しい言葉で、語りすぎてる。

感謝、親切、正直が核となる。

(家庭について)

親自身がよりどころを持たねばならない。人生の目標をかかかける。そのためには、核になるものが生まれてこないと実現出来ない。目標がないから、核を持つ必要性を感じない。それと、親子のコミュニケーション。

親子の会話が展開してないと、逃げ場として、カラオケや居酒屋に行ったり、紅白歌合戦見たり、会話が苦手だという日本人の現れだと思う。歌を一方的に歌って、みんな歌い終わったら「バイバイ」。スピーチがへたで、できない。

第28回 H I (1959) マスコミ

(中高校生の問題について)

学校にも家庭にも居場所がない。どこで吸収しているかというと、街やコンビニだったり、自動販売機の前。家庭も先生も熱心に、いじめをなくそうとか学校にこさせようとしているが、違う方向にいっている。逆効果で、頑張らせすぎではないか。子どもの声に耳を傾けることができない。

(若者の服装等について)

ぜんぜんかまわない。ぜったいするなど規制する必要はない。雑誌の表紙等に使っているので、それを受け入れつつ、かっこいいという気持ちを大事にしたいと思っている。彼らの自己主張や表現。限られた制服があるからこそルーズの意味がある。私服になれば意味が全然なくなる。大人のいびつな規制に対する主張。現象面で眉をひそめてもしょうがない。なぜそこにいくのかに目を向ける必要がある。

完全に自由化したら、ああいう状態にはならない。自由化すれば、自分たちの中で基準ができてきてくる。今は大人の目を意識して、つっぱっているだけ。

原宿なんかのファッションを見ても、その人らしさというものを出して、自分を主張するファッションがある。若者は、若者の個性をだしていくべき。ニューヨークや原宿では普通なのに、学校では浮いてしまう。むしろ応援してやったほうがいい。

(『援助交際』について)

女子のほうが精神的に大人。自分を語る言葉を持っている。女の子のほうが、妙に世の中分かっている所があり、援助交際についても、大人の社会の反映、鏡であり、なぜ援助交際いけないのかという事は、道徳的に言っても意味ない。あなたの魂にとっていい事だとは思わないししか言えない。しろともするなども言えない。

(『援助交際』の相手をする大人について)

高校生たちも、きれいになりましたから。行動として、買う側には回らないとは思うが、いいなと思う気持ちはある。買う行為まではしないけれど、付き合ってみたいという気持ちと、自分の娘がこういう年になった時にどうかなというためらいの両方ある。反面ではファンタジーとしてつきあえたら楽しいだろうという願望みたいな気持ちと、娘と同じ年の子とつき

あってどうするのかという倫理的な問題。ファンタジーであり、リアリティを持ってくると大変。実際に相手をする人についても、理解できる面がある。自分はかろうじてモラルが勝っているけれども、ファンタジーのほうによってしまえば、いっちゃんかねないという事も分かる。分かる事と善悪とは別。善とは思わないが、分かる事は分かる。

(男女平等について)

会社では男女差別がまったくない。雇用面でも昇進でも。女性の上司もたくさんいる。今の日本の社会では、ここまで制度面とか態度面とかで男女が平等というのはまだ少ない。細かいマネージメントの場面などで、女性ならではの問題がある。ただ、女性上司は、完璧主義で自分が非常に頑張って今のポジションをつかんできた人。だから、部下に自分のようにがんばれない人がついた時に、どうやってがんばらせるか、モラールをあげていくかのが苦手。なぜ自分のようにがんばれないのか理解できない。そういう面で、女性のリーダーと部下との人間関係で職場のストレスが結構生まれている。

男性以上に男性化しないと生き残れないという厳しい企業の論理があり、女性らしさを発揮しつつ、仕事の中で有能さを発揮していくというスタイルが、できていない。もちろん何人かはいますが、それが認められて、ポジションがあがっていくという方向にはなっていない。男は男、女は女と認めあって、その上でイーブンになるのが平等だと思うけれども、スタンスが難しい。そういう発言をすると、不平等ではないか、女性は女性らしさを発揮しろということを曲解していくと、男と女は違うというふうに戻っちゃいかねない。制度や報酬や仕組みは平等なんだけれども、ソフトの部分で女性らしさとは何かという問題もあるが、男女は違いがあるんだっていう事を。

(メディアについて)

TVとか雑誌の見出しが、いわゆる民衆の不安を煽って、それに答えるほうが売れる。そのことと、問題をいい方向にかえていくというのは別のこと。

(学校について)

学校が制度疲労を起こしている。外的な環境が激変してきているにもかかわらず、明治以来の一斉教育は変わってない。学校でできることをもう少し限って、あれもこれもすべて学校のせいといわず、教科教育はできるが、それ以外の人間的な成長とかは学校だけに任せておくのは不自然。選択の幅を広げて、不登校にしても、いかないコースも選べるといい。マイナーなものとしないで、進路がもっと複線的になってもいいと思う。先生の養成は、命や身体感覚を意識したトレーニングやコミュニケーションを大切にし、人を説得したり必要な情報をスキャンニングし再編集していく能力を教える必要がある。何かの教科に貼り付けるのではなく、コミュニケーションという教科を作ればいい。それを教えられる先生がいない。

(家庭について)

中高生の親の親世代は、戦後に価値観が混乱し、いろんな物を捨ててしまい、その混乱が尾をひいている。父親の役割が失われ、母親の役割が肥大化している。何かを断ち切るとか、絶ち切ることを支援していくという父親の役割がとれていない。父親の不在と母親の過剰の

二つが、子どもたちを歪めている。母親の役割は、誕生から母親の愛で包んでやること。父親は企業戦士として仕事を口実に、家庭の問題に責任を持って対処してこなかった。

(地域について)

子どもの居場所としてのコミュニティの機能がなくなった。いろいろな人がコミュニティに居て機能していた。高度成長とともに、こうした機能が失われた。

※命に直接触れる場が少なくなった。老人の死も身近に感じられず、バーチャルな物で、リアリティがなくなった。

※大人は、自分の世界を作ることに真剣になったほうがいい。子どもを気にし過ぎている。

第29回 H N (1943) 会社役員

(中高校生の問題について)

教育の問題に行き着く。小さい時から、自分がどうあるべきかというビジョンが、描かれずに与えられてない。教育の段階や家庭の中で、流れる雰囲気がある。

何かやれと言えばやるが、それしかやらない。自分のものさしでしか考えていない。

(若者の服装等について)

個人的には、極めて不愉快。ファッションも許されるものならいいけど。通学の途上では、逸脱している。遊びであればいいけれど、元に戻る時は戻るべき。注意はしないが。男の子のピアスは論外。

(『援助交際』について)

大人が悪いけど、教育のシステムが若干物足りない。優劣をつけずに、相対的にみんな同じという教育がなされている。優秀な生徒も表彰できない。そういうものが、積もり積もって、物足りなさがある。行くところがないから、自然にそっちの方に行く。環境が、そういう方向にエサを与えて、釣り上げてるようなもの。

子どもも大人も、我慢することに慣れてない。経験する機会もないし、欲しいものをいつでも買える。お金がないから我慢して、という感覚が無い。欲しいと思えば、いくらでも身近にある。それが段々エスカレートしてきた。何かするにしても動機がある。

(『援助交際』の相手をする大人について)

東京都で淫行条令は、当然のことやるべき。ダメと言ってもやる大人は法で縛るべき。未成年者の場合は保護されるべきだから当然。少年法の改正も、時代の流れで、見直すべき。

(男女平等について)

今の方針の男女平等でいい。義務も発生するし、権利もある。就労時間にしても、女性の深

夜労働も緩和され、変わってきた。肉体的に緩和する必要はあるが、女性でも肉体的に鍛えれば、女性の方が優秀になりうる。

私たちの業界では、女性の進出は率先している。そういう対応をしろと縛りが入っている。総合職をとれば活躍してもらうということで採用している。逆に、大多数の意識が変わらないと、制度だけが出来てもうまくいかない。そのあたりに難しい問題がある。

(学校について)

教師にも権限を与えて、先生方が過敏になり、しり込みするようなことはやめて欲しい。人間を差別しない、平等である、権利の主張と、その辺と関係している。

(家庭について)

学校の運動会などで、親の自己中心性を感じる。親が学校に対して過剰に罪や損害を要求し過ぎる。極めて遺憾。先生に任せた以上、任せればよい。しつけも含めて任したらいい。家に帰ったら、家でもちゃんとする。相互のコミュニケーションは必要。

※家庭も含めて、日本の国の教育システム全体が物足りない。学校以外にも市民社会の中にスポーツクラブなどがあれば、団体の生活の経験もできるだろうし、いろいろな世代との経験もできる。そういうものが、今の日本にはない。あるのは学習塾で、教育産業という枠の中に放り込まれている。

※徒党を組んだり、群れを作って遊び、その中で集団のノウハウが経験できた。若い世代の人たちの場合にはそれがない。そうした中で、経験させ大人になっていくことが必要。

※集団での規律は、一定の時期に必要。段階を踏んで、子どもを教育し、経験をさせることが必要。学校教育をそういう大きなシステムの中にきちんと位置づけることが必要。

※子どものたちに夢が無くなってきた。今は、そういうものが出てこない。

第30回 KU (1942) 小学校長

(中高生の問題について)

頭のいい子が学級の中でリーダー的な子どもになってるかというと、そうでもない。学校の勉強はできるけども、友達との人間関係がだめな子が多い。遊びでも、友達の遊びについていけないとか、他の子達との付き合いがうまくできない、けんかをする、自分の思い通りにならないと自分の殻に閉じこもっちゃう。そういう事について、親が充分に知らない。自分の子どもが果たしての役割について知らない。

(若者の服装等について)

規律をやぶろうとする1つの流れ。仕方ない面もあるけば、やっぱり一定の線がある。学校として、きちんとした基本姿勢が必要。ある程度規制する必要がある。社会のルールがあることを示さなければならない。何でもやってもいいことではない。

(『援助交際』について)

父親がしっかり女の子の行動に目を注いでれば、そんなにひどいことにならない。

(『援助交際』の相手をする大人について)

性的なものが社会にあるとは思うけど、大人の常識が問われる。大人は、もっとしっかりしなければいけない。売るとか、何でも商売商売だし、そういう考えの人が多い。

(男女平等について)

夫婦別姓など、自分の意識の中では考えられない。男女混合名簿を主張する教員がいるが、これも考えられない。男女平等とは、男は男の立場、女は女の立場があるのだから、お互いに尊重していくこと。お母さんには、お母さんの仕事がある。ところが、仕事をほっぽいとして、社会に出ている。お母さんはお母さんの仕事があって、それを尊重してかねばならない。今は、間違った男女平等になっている。同じ事をすることが平等ではない。

子ども達もお父さんやお母さんの立場が見えないし、だから女の子は女らしいってことがなくなってきた。古いと思うけどね、大事なことだと思う。校長の学校経営の意向も伝わらない。変な民主主義になっている。

(学校について)

教師の指導力が問われる。指導力のある教師が揃ってる学校は、子どもがきちっとしてる。子ども達も周りが当たり前だと思うから、自分も当たり前だと思うようになる。周りがざわついてたら、ざわつくのは当たり前だと思う。大事なのは、地域が学校をバックアップしてくれるかどうか。してくれないと学校も苦しくなる。学校だけでは無理。

(家庭について)

家庭で1番大事なのは父親のあり方。援助交際は置くとしても、家庭内の問題は父親がしっかりしてれば問題ない。特に高学年の場合に、親が子どものことを知らない。日曜日に塾に通わせる親は、いい学校やいい進学校へやりたいってことだろうが、そういう子の担任の見方はきびしい。勉強さえ出来ればいいという親自身の考え方で、自分の子を中心にしか見ていくなく、周りの人付き合いをしない。PTA活動を一生懸命にやる親は、学校に協力的で、子どもうまくいっている。

友達関係で、自分の子がいじめられてたりなんかすると、結果をすぐ求めたがる父親の威厳がない。そういう意味で父親の存在感がない。お母さんが働きに出るということはいいことなんだろうけども、同時に家庭での母親の教育がなくなった。

食事の用意や準備とか、日常の基本的な生活行動パターンが、なされていない。モデルがなくて見えない。経済的な側面だけで、女親が外に出るのは疑問に思う。

(中高校生の問題について)

女子高校生が気になる。ルーズソックスが続いているし、有名な俳優や歌手のスタイルやお化粧がはやれば、それが続いている。なんで女子高校生だと援助交際がクローズアップしてくるのか。

(若者の服装等について)

ミニスカート、ルーズソックス、駅の階段でお尻を押さえている姿を見ると、もっと長いものを履けばと思う。画一的で自分の個性、自分に合う化粧方法とか服装方法を取り入れていない。昔もバンカラ風なのがあったが、ごく一部であった。今は、流行かぶれの人たちの層が、広い。ピアスや化粧について、男性には違和感がない。

(『援助交際』について)

性的に興味を持った中学生や性的な関係をもった女の子を断ち直すのは難しい。いくら言って聞かせても、立ち直る契機がありませんでした。女の子がそれを商売の糧にするとなりますます難しい。家庭でも学校の先生でもお手上げ。時期が来るまで待たなければならないのか。「自分の体だから、何をしようが勝手だ」と言う者に対して、大人として、母親として、父親として、教師として、どのように言い聞かせていいのか。

(『援助交際』の相手をする大人について)

そういう行動に走らせる、大人がいる限り無くならない。究極の責任は大人にある。ストレスや興味等いろんな意味合いがあると思うが、供給と需要の関係からも大人に責任がある。売春は世界で古い職業だと言われているし、完全に無くならないとは思うけど。高校生より中学生とか、幼児に興味をもつ人がいるということ事態が問題。セックスの相手を自分と対等、年齢相応の人たちに向けずに、自分たちより弱い者へ目を向けていくという社会病理的な面に原因がある。

(男女平等について)

女性は、ますます社会にでていくだろうし、母親は育児もあり男性以上に負担がかかる。それに対して行政は、バックアップしていかなければ、小子化の歯止めが効かない。男性も協力体制をとらねば、女性だけに負担がかかる。でも肉体的な面で、女性が進出できない部分もあることを認めなければならない。男女平等を旗をふりあげ、拳をふりあげることには、反発を感じる。肉体労働は女性はダメと否定することもない。お互いに擦り寄せ合いながら、共生していくのが必要。条件が悪くなると「私、女だから」と逃げるの卑怯。

(学校について)

全て学校の責任に押し付けられてきた。学校は、いじめる対象にしやすい。子どもの生活時間の2/3は家庭にあるのだから、家庭は家庭独自のスタイルを持たなければいけない。人間関係やコミュニケーションがとれない若い教師が多い。自分の自己主張ばかりして、相

手の気持ちを思いやったり、相手の意見をきかない。聞くコミュニケーションの取り方が下手。話のやりとりをしないで、投げたきり。

(家庭について)

3歳ころまでに決まってしまう。母親ばかりにではなく、父親も責任がある。団塊の世代の人たちが、中学生から高校生の親になっており、その世代の問題が吹き出てきている。基本的な生活習慣を身につけないで育ってきている。落ちこぼれをなくそう、競争させないといった教育に原因の一因がある。

挨拶ができない保護者がいる。こうした親を対象にして話をしようとするが、そういう親はきてくれない。

授業参観などには、父親がきている。学校の行事に協力しよう姿勢は見られる。地域的な特徴もある。

※少年法の改正の動きに関して、検察官なりの立ち会いがあってもいいと思う。「自分はこういう年齢だから、なんかあったって、絶対に罰せられることはない」ということを聞くと、年齢を下げてもいいと思う。

※私は、これからは、性教育も大切だが、死の教育をする必要があると思う。死を裏返せば生。生から死に至るまでの中で、性教育をする必要がある。コンドームがどうのとか、セックスがどうとかでなされている。それもそれなりの効果があると思うが、人間の一生の中を通して、性教育を考えていく必要がある。そうすれば、自分の体は自分だけのものではな、太古の昔から受け継がれたものだから、そんな安く売るべきものではないことに行き着くと思う。

第32回 Y Z (1930) 公務員

(中高生の問題について)

当事者としての責任があいまいになっている。加害者としての問題もあるが、被害者の側が考えられていない。ただ、彼らを立ち直るようにさせる仕組みがあいまいで、彼らは被害者かもしれない。

(『援助交際』について)

援助交際という言葉自体に危険性がある。諭され、戒められ、反省を促すようなことが、カモフラージュされている。きちんと学校でも家庭でも、教えられていないから、よほどのことがなければ、本人自身もそのことの持つ本質的な危険性に気づかない。ただ、援助交際に限らず現代の若者の非行といわれるもの全体について、社会の扱い方に不満がある。家庭環境なり、成長のプロセスが非常に恵まれなかったからとして、扱われることが多い。そのこと自体は否定しないが、そういう境遇の子どもがみんな間違いを犯す訳けではない。その意味で、少年法改正論議も加害者の立ち直りのための人権論に過ぎる。被害者の人権に論及されることが少ない。その結果、甘やかしとか「俺が悪いんじゃない、社会が悪いんだ」「大

人が悪いんだ」という影響を及ぼしかねない。

援助交際の場合、便利さとか、楽しさだと、それを生み出す苦労だと、そういうお金の持つ意味や大切さが、家庭でも学校でも、とりわけ家庭できちんと教えられていない。

(『援助交際』の相手をする大人について)

少なくとも産業社会の中で働いている暮らしの中で、解放されておらず、歪んだ形で、うっぶんを外に晴らしている。たまたま享楽的な形でそれが出てる。同時に、旅の恥は搔き捨てのように、見ていなければ何してもかまわないという風土が、これまでの大人社会の『文化』の中にある。非常に歪んだ形で性的なはけ口を求めているのに、援助交際というネーミングで罪悪感を薄めている。罪悪感を否定するのに都合のいいようなネーミングで、自分の娘とか、親が子どもに対して当然持つ感情や心情を喪失している。女性を対等なパートナー的な人権の持ち主という風には思っていないことも作用している。

(男女平等について)

結局は、本質的なところで浸透していなかった。浸透過程にあるのかというか、単に発達段階への一段階という意味でのプロセスだけじゃなくて、その教えられ方にもかなり問題が残ってるんじゃないかなと思う。

(メディアについて)

本来は個人や家庭で、きちんとされてしまるべきことがされていない。さらに日本の情報化社会の動きの中で、特にマスコミは、世間が正常に変化なく動いてる時には、病理現象や事件性のあるものについてしか報道しない。特異性っていうのか、ものめずらしさとかね、衝撃的な、そうしたことだけが瞬時に広まり、それが多くの人たちの姿勢の有り様を作ってしまう。こうしたことに対する苛立ちみたいなものがある。

(学校について)

戦後の改革それ自体がね、政治改革であれ、経済改革であれ、倫理、モラル、家族生活の改革であれ、上滑りというか、言われたから受け入れただけ。教えろって言われたから、学校で教えただけ。人間としての生き方の平等さとか、厳しさとか、長い将来のプロセスとしての発達とか、そうした意味がきちんととられないまま、現象的に受け入れられてなされている。周囲の状況が変わると、それに抵抗しないで、改革や教育それ自体も、周囲の変化に従って影響されてしまう。

(家庭について)

戦前の日本の教育では、自主性を悪として、自主性を育つことが悪として育てられてきた。当時の大人は、戦後の変動の中で、捨てなくてもいいものまで捨てて、1950年以降になると、捨わなくてもいいもの、捨ってはいけないものまで拾ってきた。経済社会の状況変化を目指して、問われなければいけなかった時期に問われないままにきた。一番大きいもののひとつに、家庭生活の有り様がある。

家庭生活のあり方は、主体的に受け止めて問われなければいけないのにも関わらず、問われ

ないままにきて、体制の古さや、経済社会的な消費文化とマスコミとの作用もあって、私生活に都合のいいように受け取られたまま、ここまでできてしまったなっていう気が非常にします。

※日本には、教育とは個人の個性に即した発達を助長することだという認識が、為政者も含めてない。それから、家庭と学校を遮断して考える。社会が、人間発達を真剣に考えるようになっていないことの表われかもしれないけど。社会がマイナス現象を生み出せば生み出すほど、学校は模範的な教育がなされるべきところだという真剣な取り組みなしに、学校抱え込み主義、あるいは学校に抱え込ませる主義というようなものが非常に大きい。学校もそれに応えて、『援助交際』も含めて、学校の外の社会の歪みや病理に発生したことを、学校だけでなんとかしようと思い、世の親たち一般も学校になんとかしてもらいたいと思う。そういう無謀さ、無知さが、依然として克服されていない。

※為政者の教育認識が厳しく問われなければいけない。臨教審なども、具体的な内容はともかくとして、教育という営みのもつ固有の性格や意味を認識しないまま、もっぱら経済合理主義で歪みを是正しようとして、社会的問題を見過ごしてしまう風潮を生み出した。

※身を清く保ちながら、平等な条件の下で競争をして発展をしていくという、人間の経済活動を歪まないように、方向づけるような、社会倫理のようなものが、日本にはない。

III. 考察

III-1 現代の中高生の若者をどのように見ているのか

大人たちは、現代の若者たちをどのように見ているのだろうか。若者の問題は、社会や大人の反映であり、若者だけに視点を当てて分析するだけでは、彼らをどのように導いたらよいのかは見えて来ない。彼らもやがては社会人として大人になっていくのだから、彼らを受け入れる大人側がどのように現代の若者を見ているのかの分析は、重要な役割を果たす。今回の面接の導入として、「中高生の問題について、日頃感じていることを」という質問から始めたのも、こうした前提に立脚していたからであった。

結果的に、様々な角度から、日頃から若者に対して感じている内容を聞き出すことができた。内容は多岐にわたっているので、ここでは、現代社会の病理として注目されている「いじめ問題」と現代の若者の行動傾向や心理的特徴について、さらに若者たちを一面で特徴づけている若者の服装等について、大人がどのように捉えているのかについて整理しながら考察してみよう。

III-1-1 いじめ問題について

現代の世相を反映してか、「中高生の問題について、どのように考えているのか」という導入に関して「いじめ」の問題を真っ先に指摘するものが目についた。「仕事がら転勤が多いので、いじめの問題に関心がある。子どもをいかに守れるか妻とよく話す」(S I)という指摘は、「いじめ」問題が中高生を持つ今日的な親の関心事であることを示している。さらに、「昔からいじめ問題はあった。しかし、あそこまで徹底的にはしなかった。やっていいことと、悪いことについてのルールがあったが、今はそれが曖昧になっている」(K O)、「いじめは昔からあったことで、それをマスコミが焦点を当て過ぎているだけ。そんなに悲観する状況ではない」(H O)、「昔は暗さがなかった。いじめる方も限度を知っていた。今は暗い方に走ってしまう」(S E)というように、過去の状況と比較しながら、今日の「いじめ」の特徴づけようとする指摘も見られる。

III-1-2 行動傾向や心理的特徴について

現代の若者たちについて「ルールを守らない子どもが増えてきた」(S I)、「生活の基本的マナーができていない子どもが多い」(K T)、「これまでの社会規範が解体している時期にいて、それが問題になって現れている」(K A)と、生活の基本的ルールやマナーが乱れていることが指摘される。その背景にある心理的特徴として「自己中心的な子どもが多く、我慢できず頑張って何かをなし遂げようという子どもが少ない。怒られ慣れていないので、指導されたり注意されると直ぐに反発したり反抗的になる」(K I)と自己中心性が指摘される。

「自分のものさしでしか考えられない」(H N)、「自分の弱いところを追求されたり、触れられたくないところを触れられた時の反応の仕方が、慣れていない。瞬間に思ったことを口にだしてしまう」(M Y)、「ストレートに口を出すように見える。小学校の低学年から言いたい放題。そのためには喧嘩になることもある。自己主張が強い」(I S)、「悪い

ことをしても注意しない大人が悪いというのが、今の若者の典型的な発言形態」（I N）等の指摘も、同じような捉え方していることの現れと思える。

さらに、対人関係やコミュニケーションの仕方のまずさを指摘する発言も少なくない。「言葉づかいも、短縮して言葉を略してしまい、断絶を感じる」（I K）、「群れてはいるが、その中でコミュニケーションがあるとは思えない。ただ、群れから外れることを非常に怖がり、群れから離れられない」（T E）、「人間との接し方が下手。人に意見を言う時も、相手がどう感じるかが分からず、人間関係を壊してしまうことがある。グループから外されることに敏感で、くっついている」（M Y）、「学校の勉強はできるけど、友だちとの人間関係がためな子が多い。遊びでも、友だちの遊びについていけないと、他の子どもとの付き合いがうまくできず、喧嘩する。自分の思い通りにならないと、自分の殻に閉じこもってしまう」（K U）等の指摘である。

その他、「自分の居場所がない」（M Y）、「学校にも家庭にも居場所がない。どこで吸収しているか」というと、街やコンビニだったり、自動販売機の前」（H I）、「高校生で挫折してしまった感じの子を見るとかわいそうに思う。その頃に何かしないと、捌け口がない。捌け口を用意するのが大人の役割で、社会がいけない」（I K）等と、今の子どもたちには心地よい居場所や捌け口がないと指摘しながら、それを用意するのが大人の役割であるとする発言もある。「『援助交際』について面接した時に『相手のこと』を聞いたら、『馬鹿にしている』と言う。大人を権威として捉えていない。中年の大人観が崩壊している。思春期には権威に反抗するが必要だが、それが崩壊すると子どもは不安になる。頼りたいのに頼れない」（F J）との発言は、さらに大人の責任に触れた指摘である。

III-1-3 若者の服装等について

最近の若者の服装等に関して、女子の短いスカートやルーズソックス、ピアスや茶髪の流行等、大人を戸惑わせる風潮が少なくない。こうした若者の流行に対して、「全然抵抗がない。自分も同じ世代だったら茶髪にしていたかもしれない」（H R）や「全然かまわない。絶対するなど規制する必要はない」（H I）と全面的に容認する発言は稀で、「流行だから仕方がない」と諦めたり、「他人がするのなら構わない」としながらも「自分の子どもの場合には許せない」というのが多くの見方と言えよう。

「短いスカートは、自分の娘がしたら、張り倒してしまいかねない。ピアスや茶髪については、自分と関係ない人がやる限り何とも思わない」（K O）、「会社では困るけど、私服で街を歩くぶんには構わない。個人的には好きでないが、個人の好み」（S I）、「他人に迷惑をかけない限り、別に構わない」（K T）、「自分の社会通念とのズレを感じるけれど、見るだけなら、別に構わない」（I M）、「違和感はあるが、流行に影響されるのは普通だろうと思う」（S A）、「自分は好きではないが、だからということはない」（C H）、「ピアスも風潮として認めざるをえない。自分の子どもたちには、やめさせたい」（F U）、「若者が髪の毛を染めることを当たり前という風潮がある。一時の風潮で、しょうがないと息子に妥協している」（N A）、「奇抜な格好して目立とうということは当然。そんなに悪いことでは無い。会社にそういう子がきたら困るけど。子どもがしたいと言ったら議論する」（S E）、「個人的には極めて不愉快」（H N）、「仕方ない面もあるけど、やっぱり一定の線がある。社会のルールがあることを示さなければならない。何でもやっていいこと

ではない」(K U) 等の発言は、個人的には認め難いが仕方がないといった気持ちを示している。

特に女子の短いスカート等については、「短いスカート等、周りが性の対象として見でしまう。襲われてもしようがない」(K O) や「セックスを感じさせない服装が望ましい。犯罪に巻き込まれる危険性がある。短くするのはやめさせるべき」(Y A)、「女の子の崩れた感じが目立つ。お化粧していると、一人前の大人に見えたりする」(H O) 等男性を刺激するから止めるべきだと、一方的に男性の立場に立脚した発言も見られる。特に K O は、「自分も、短いスカートは気になる。特に、きれいな子については。ただ、見るだけ」といった差別的な発言に結びついている。

ピアスに関しては、「男性のピアスも別に問題ではない」(S E) や「ピアスや化粧について、男性には違和感がない」(O O) とするよりも、「男性のピアスは特に嫌。女だったら許せる」(I N)、「茶髪やピアスは、男の子に関して特に絶対反対」(I K)、「男の子のピアスは個人的に嫌。娘も未成年の間は駄目。大人になったら、自分の責任」(C H)、「男のピアスは嫌。男のやるものではない。女の子も、中学生や高校生は嫌だが、年頃になれば絶対駄目だとは言えない」(N A)、「男の子のピアスは論外」(H N) 等と男の子の場合に特に否定的な発言が多い。

III-2 『援助交際』について

男性の大人たちは、『援助交際』についてどのように考えているのだろうか。ここでは、『援助交際』という社会現象に対する大人の視点について、なぜ『援助交際』に走るのかという理由、『援助交際』を生み出している社会的な原因、『援助交際』の持つ問題性と大人や社会の対応等といった視点から考察してみよう。

III-2-1 『援助交際』に走る理由について

理由に関しては、「社会的な現象に乗っかって、安易にお金を稼ぐ方法にしている」(K O)、「基本的にはお金が欲しいからやっている」(A Z)、「良いことか悪いことかの判断ができないからか、お金が欲しいからか」(N S)、「お金に敏感に反応するから」(K A)、「とりあえずお金になることに」(F J)、「結局、おしゃれやブランド物の購入のためのお金が必要」(U E)、「安易にお金を得ようとする」(N A)、「流行を追うためにお金が必要」(S E) 等、「お金が欲しい」からを指摘するものが多い。しかし、「お金が欲しい」からというだけでは、『援助交際』に走る子どもとそうでない子どもの違いを説明することはできない。この点に関して、「やる子とやらない子の違いは、家庭環境にある」(N S)、「『援助交際』に走るかどうかは、学校や家庭の教育の問題」(U E)、「両親の愛情の問題」(A R)、「親が気づかないのが不思議、日頃から接していれば分かるはず」(S I)、「家で相手にされないと、友達と夜に出歩いてしまい、行き着くところに行ってしまうかもしれない」(F U)、「する子としない子の違いは、家族の問題」(K N)、「家庭に居場所がない」(N S)、「父親がしっかり女の子の行動に目を注いでいれば、そんなにひどいことにはならない」(K U) 等、特に家庭における親の愛情や教育の問題として一般化される傾向がある。

その中で、「『援助交際』に走る子どもたちは、言葉で自分を語れず、コミュニケーションが取れない子どもたち。ブランドや流行を追い、着ているものでしか自分を語れず、それで自己表現していると錯覚している」（T E）と『援助交際』に走る子どもの言語的なコミュニケーション能力の無さを指摘した発言は注目される。

III-2-2 『援助交際』を生み出している社会的原因

『援助交際』を生み出している社会的な原因として、「情報過多によって他人が良く見え、いろいろな物が欲しくなる。友だちがバッグを買えば欲しくなる。親からはお金が貰えない。アルバイトしても買える額ではない。一番手っ取り早いことというので、『援助交際』に転がってしまう」（A R）、「他の人もやっているという情報により、やってみたいという好奇心と他の人もやっているからそんなに悪いことではないという意識によって」（H O）、「そんな風潮を煽り過ぎている」（F U）等と現代社会における情報の影響を指摘するもの、「飽食の時代に育った親の世代に問題がある。自分の子どもには厳しくても、他人には全く逆。他人のことは考えない」（H R）と親世代の子育ての失敗に言及したもの、「性の解放が通俗的なレベルで浸透している感じ」（K A）、「社会が認めて助長するようなシステムを作っている」（H O）、「彼女たちをブランド化している社会」（M Y）等と社会一般の傾向が指摘されている。

さらに、「ものがあり過ぎる」（O Z）、「世の中が豊かになり、お金があれば何でも買えるようになった。途中の努力や苦労を飛び越えて、安易にお金を得ようとする」（N A）、「貧乏とか困ってとかでなく、ベースが非常に高い。昔は、欲しいものが買えないと、盗むなり他人に強要するなり、者で要求した。今は、お金。自分でお金を出して買う。物そのものというよりも、物の種類が多くなり、いろいろな種類を手に入れたい。そのためにもお金が必要になる。対象が物というよりも、流行を追いたいという気持ち。その中にブランドがある」（S E）といった発言は、物質的に豊かになった現代社会の影響を指摘したものであり、「ブランド品や外面向的なものにこだわるのは、内面を育ててこなかった」（H R）と自戒を込めながら大人の責任に言及した発言もみられた。

III-2-3 『援助交際』の問題性と大人や社会の対応

『援助交際』の問題性に言及したものとして、「自発的のようだが、実は欲望にとりつかれていて、それによって操作されながら行動に走るという意味で、自由ではない。女の子も、商品価値としてのモノだけを売っていて、解放されていない」（K N）と『援助交際』行動に内包される問題性や、「『援助交際』という遊び的な言葉で、売春という認識をしていない。マスコミも売春という言葉を明確に使えばブレーキになりうる。中性化した言葉でごまかしている」（I N）、「『援助交際』という言葉自体に危険性がある。諭され、戒められ、反省を促されるべきものが、カモフラージュされている。きちんと学校でも家庭でも教えられていないから、よほどのことがない限り、本人もそのことの持つ本質的な危険性に気づかない」（Y Z）と『援助交際』という言葉自体の持つ問題性が指摘された。

ところで、『援助交際』という今日の現象に対して、「由々しき問題」（Y A）、「想像を絶する」（S I）、「暗澹たる気持ちになる」（S A）、「極限状態だと思う」（K N）等の嘆きがあっても、こうした現象に対する社会や大人の具体的対応策になると「常識では

明らかにおかしいけれど、何故いけないかを論理的に説得するのは難しく、感覚的に親が嫌がることはやめろという叫びでしかない。第三者の高校生に客観的に分かるように言うはどうしたらいいか分からない」（IN）、「大人社会の鏡であり、何故いけないのかという事は、道徳的に行っても意味無い。あなたの魂にとっていい事だとは思わない」としか言えない。しろともするなどと言えない」（HI）、「自分の体だから何をしようと勝手だという者に対して、大人として、母親として、父親として、教師として、どのように言い聞かせていたらよいのか」（OO）等と苦衷し模索している様子が伺える。

最後に、「自分には息子しかいないから深刻に考えないが、感性がなくなってきた感じがする」（SI）という発言は、「『援助交際』やっても、『俺の娘がこうだったら』と自分の子どもに置き換えることができない。自分の娘は考えるけれど、他人をそういうものの見方で見れない」（HR）との発言と併せて考えてみると、子どもの問題を一般化しようしない大人側の気持ちを代弁しているように思える。

III-3 『援助交際』の相手をする大人について

『援助交際』には、当然ながら、その相手をする大人の存在がある。今回の調査の意図は、一方の当事者である女子高校生に分析のメスを入れるだけでは不十分であり、もう一方の当事者である大人の分析を試みるための視点を検討することにあった。大人として、『援助交際』の相手をする大人たちをどのように考えているのだろうか。

先ず、『援助交際』の相手をする大人に対する一般的な印象として「寂しい人」（KO）、「『なんたるか』という感じ」（YA）、「自分の意識の外側」（KT）、「ストレスがそれ程までに強いのかという感じ」（IM）、「非常に寂しい、むなしい人」、（TE）「情けない、誇りはないのかという気持ち」（FJ）、「何なんだと思う」（HO）、「腹がたちます」（CH）、「怒りを感じる」（MY）、「ごく限られた不良な大人」（FU）、「普通の神経がズれている」（IS）、「大人の常識が問われる」（KU）等と否定的な言葉で嘆く声が多い。

さらに、「大人の判断が間違っている。売ってるから買ってもいいというものではない」（OZ）、「需要があるから供給する」（EG）、「一番の責任者は買う方。需要があり供給があるのであるのだから。どちらが先かは分からぬが、少なくとも買う人がいるから、売るという行為が成り立つ。完全に大人の男の問題」（CH）、「需要と供給が合致すれば、何でも取り引きしていいとは思わない」（HI）、「需要と供給の問題」（NA）、「そういう行動に走らせる大人がいる限り無くならない。究極の責任は大人にある。ストレスや興味等いろんな意味合いがあると思うが、需要と供給の問題からも大人に責任がある」（OO）と需要と供給の問題だとしながら、男の大人の責任を明確に指摘する発言も見られる。

こうした大人側の問題は、性に対する男性特有の心理や男の本能と結びつけた発言となっている。「男性は、素面の時に抑制できても、酔っぱらうと抑制できなくなる時もある。今後、自分は絶対やらないかと言われれば、時と場合による。周囲に妙齢な女性がいれば、自信がない」（KO）、「正直言って、僕の中にもそういう気持ちがゼロではない。チャンスがあれば、やってたかもしれない。チャンスがなかったし、してはいけないという自制心もあって、積極的には動かなかった。積極的に動けば、チャンスをつかんだかもしれないし、

つかみ得たとも思う。自制心が働くか否かは基本的に年齢が若いからかと思うが、そういうものを求めるのはある意味では本能的なもの。避けられない部分というか、永遠の課題」（U E）という発言は、男性として正直な発言かもしれないが、「男は○○」という一般化から脱却することの困難さを示しているとも考えられる。

さらにこうした傾向は、「男の本能」や「男というものは」と男性を一般化して捉えながら、風俗店や売春はその反映であるという視点に結びつく。その中には、女性の価値を若さや可愛らしさに置き換えたり、男の本能として合理化しようとする傾向も見られる。「売春は、世の中に女と男がいる限り、商売として無くならない。しかし、女子高校生を相手にするのは汚らわしい」（K O）、「一つの風潮で、自分も付き合うなら若い女性の方が言い。男は40過ぎると、風俗的にそんな考えが多くなる。自分に照らしても、周囲を見ても、そういう傾向が見られる」（K A）、「男としていろいろな経験をすることは意味があるけれど、安直に経験をお金で済まそうとする雰囲気が今でも続いている。男女の関係についても、幼稚な部分での楽しみしか男は求めていない。その意味で、男の中に未発達な意識がある」

（N I）、「男は本能的にそういう風にできているものという気もするが、ある程度年齢を重ねたり経験を重ねたりした大人であれば、律すべき」（S A）、「男がお金を出して性を買うのは昔からあった」（C H）、「若いとか可愛いというイメージが、男の本能的な部分をくすぐっている面もある。異性接触欲望、性に対する欲求は、男子の方が強い。風俗業界等、ほとんどが男の人対象。性欲のメカニズムが違うので、そういう産業も発達しているし、女子高校生が金になるという風潮もでてくる」（K I）、「男が払うこと自体は分かるが、行動するかは別問題」（K N）、「男は、昔から女性を買うことがあった。人善の性欲は、いくつになっても、どの時代になってもあった」（N A）、「性の捌け口を求めようとするのは、おじさんの心理。昔はお金で捌け口を求める場所があったが、今は『援助交際』」（S E）、「世界中にそういう場所が必ずある。男の問題として否定できない事実。たまたま日本では、プロの女性が法的に存在できないようになったために、素人の人が出てきてしまったのかもしれない」（I N）、「自分は買う側には回らないと思うが、いいなどいう気持ちはある。付き合ってみたいという気持ちと、自分の娘がこういう年になった時にどうかなというためらいの両方がある」（H N）、「売春は世界で古い職業だと言われてゐるし、完全に無くならないとは思うけれど、高校生より中学生だと幼児に興味を持つ大人がいるということ自体が問題」（O O）。

さらに、「『旅の恥はかきすて』というように、日本を離れると人格が変わる人がいる。周りに知っている人がいないと、平気で道徳心を置いていける」（Y D）、「日本では、センセーショナルに煽り立て、何でもお金のネタにしてしまい、無責任にやり過ぎている」（C H）、「『旅の恥はかきすて』のように、見ていなければ何してもかまわないという風土が、これまでの大社会の『文化』の中にある」（Y Z）と日本社会の特徴に絡ませた発言もあった。

少数ながら、人権や差別の問題として、さらに「性の商品化」に絡ませた発言も見られる。「子どもの成長に良くないものから子どもを守るのが、子どもの人権を守ること。しかし、人権が大人にとっての人権で、責任を伴わずに歪んでいる」（C H）、「するかしないかは、人権思想や差別に対する感覚。性産業を全部否定するわけではないし、自分に経験が無い訳ではないが、行動原理として一線を引く。それは妻や娘に対する思いと同時に、一個の人間

としての生き方の問題。人権感覚思想やポリシーであり、行動の価値基準や行動原理を持ち得てない人。男が女子高校生を買う場合は、モノとして扱っている」（H R）、「女性を対等なパートナー的な人権の持ち主という風に思っていないことも作用している」（Y Z）

これに対して、「戦後、女性が強くなり、家庭でも男女同権の妻が強くなって、男としてつらいのかも。自分は、若い女性がいるお店で飲むことは好きでない。25才ぐらいまでの女の子は、経験が足りなくて、馬鹿で、背伸びしている」（I M）と、男女平等の風潮から女性が強くなってきたことと絡ませ、若い女性に対して差別的とも伺える発言をするものもある。

「娘を持つ人ではない」（Y A）と明確に述べるものから、「自分の子どもの世代まで考えている人はいないのではないか」（K A）、「子どものことを考えれば、当然しないはず」（K T）、「自分の娘の問題になれば立腹するが、他人の子だと自分がエンジョイする対象として見てしまう部分が情けない」（U E）、「『俺の娘がこうだったら』と自分の子どもに置き換えることができない。自分の娘は考えるけれど、他人をそういうものの見方で見れない」（H R）等、子どもとの関連で問題視する発言もある。果たして、『援助交際』するかしないかは、娘の有無や子どもの有無と関係があるのだろうか。

最後に、行政による取り締まりの条例化に関しては、「東京都の淫行条例については、道徳観の問題だから法的に規制する以前の問題だが、現行では規制せざるをえない」（Y A）といった消極的に肯定するものから、「買う側、売る側の両方に罪悪感がない。大人にしてみても罪の意識が無い。もっと徹底的に社会全体でやるしかない」（O Z）、「東京都の条例化は、当たり前だと思う。そういう条例が出来ること自体が嘆かわしい」（A R）、「各都道府県や自治体がそういうものを作り取り締まっていこうというのは、一つの進歩だと思う」（H O）、「行政が条例を作り禁止することは賛成。今の段階では、抑制しない限りは難しい。判断力のある大人が抑制できなければ、規制を作る必要がある」（M Y）と積極的に肯定するものまで見られ、今回の面接では異論をとなえるものはいない。唯一「東京都の淫行条例については、ある程度の年齢まで判断が未熟であるので正しい。20才ぐらいまでは制限した方が良い」（K O）のように、大人に対する規制についての疑問を内在させた発言もある。

III-4 男女平等について

前回の女子高校生の分析において、男女平等に対するきちんとした規範意識を持つ女子高校生は、『援助交際』に対しても否定的な態度を持つ傾向があることが見いだされた。『援助交際』が男女平等社会の実現に向けての努力に抗う行為であると考えるならば、大人側の男女平等に対する考え方を分析することは当然のこととなる。果たして、大人たちは男女平等をどのように考えているのだろうか。

先ず、男女平等に関する現状の認識について見てみよう。「平等思想というか、今は男も女もなくなってきた」（I M）と現代は男女平等になってきたという指摘もあるが、内容的には、女の子の外泊が可能になったことやトラック・タクシーの運転手が増加していることによる判断に留まっている。一方で「職場に女性が進出したほうがよい」とするものの、「権利だけ主張して行動が伴わないのはよくない。頭でっかち」と不満を述べる。そして

「社会の体制が出来ていないのに、権利だけ主張すると、ひずみが出てくる」と述べる背景には、社会の体制が平等になっていないという認識が伺える。

これに対して、「男女平等と言うほど平等ではない」(T E)、「不平等は大分薄れてきたけど、まだ完全な平等じゃない」(C H)、「女性が働く職域は、まだまだ残っている。まだ女性の力を上手く生かせていない」(F U)、「今の社会は男女平等になっていない」(H R)、「決して平等とは思えない。数的にはある程度平等かもしれないが、警察署長とかに女性がならなければ」(I S)、「今の日本の社会では、制度面とか態度面とかで男女が平等というのはまだ少ない」(H I)、「結局は、本質的なところで（男女平等が）浸透していなかった」(Y Z)等のように、現代社会は未だ男女平等になっていないという認識が多い。

結局は、男女平等をどのように捉えているのかが問題になる。この点になると、人によってかなりの違いが見られるが、男女の差を認めた上でお互いを尊重することが男女平等だとする認識が多い。「マナーだと、道徳だと、そういったことを別にした、価値観、人間としての価値が平等であること。男性のやるべきこと女性のやるべきことがある」(A R)、「男女は質的に違うのだから、全く同じことをするのが平等とは思わない。質の違いを認めた上で、人間として平等であると考えるのが男女平等」(T E)、「男性と女性は違うはずなのに、同じ条件にすることを男女平等というのは、平等ではない。性差は必ずあるはずだから、性差をお互いが尊重しあって、仕事の中でも条件を作って役割分担をしていくのが平等」(M Y)、「男は男、女は女と認めあって、その上でイーブンになるのが平等」(H I)、「男は男の立場、女は女の立場があるのだから、お互いに尊重していくこと」(K U)。

以上その他に、男女の違いを指摘する発言が多く見られる。「男性には男性にしかできないことがあるわけですから、全てを女性に取られてしまうとか、リーダーシップを取られてしまうのは、おかしい」(A R)、「女性はよくできるし、得意な分野がある。きめ細かさや調査・分析をきちんとすると」(K T)、「体力的に男女は差があり女性は劣っているが、知的には女性の方がむしろ優秀かも」(I K)、「男性は腕力があり力で押さえがちだが、女性は最初から力に頼らない」(F J)、「女性は、生理とかで精神が不安定な時があるので、御しにくい」(H O)、「家庭を営む場合、男と女で分担した方がうまくいく。分担の仕方、責任の持ち方で男と女は違う」(S A)、「年齢差、経験差、人間性とともに性差が必ずあり、その性差を考えるのが大事」(M Y)、「お茶を出す場合は、お客様のことを考えると、女性が出した方がしとやかな感じで雰囲気がいい。女性にしかできない役割もある」

(F U)、「細かいマネジメントの場面などで、女性ならではの問題がある」(H I)、「肉体的な面で、女性が進出できない部分があることを認めなければならない」(O O)。これらの中には、ステレオタイプ的に男女は違うものという前提に基づいたものも少なくない。男女差というよりも個人差として捉えられるべき内容でもある。男女平等を蝕んでいる一つの大きな要因は「いわれなき性別による束縛」と考えられるが、ステレオタイプ的に男女の違いを認識している限り、こうした束縛を一掃することは難しい。

こうした認識は、「差別と区別」の違いとして合理化されて語られることがある。「社会的には平等に扱うべきだが、男女で区別しなければならない面はある。私自身は、学校の中でも、特に男子女子で差別をしていない。区別はあるけれど、絶対差別はしないと生徒に話

している」(K.I)との指摘は典型的である。男女別の名簿は、体育や健康診断において、そうした方が便利で決して差別ではないと力説しているが、混合名簿にした場合に、具体的にどのような不便さが生じるのかについて考えようとしている。従って、「不必要的区別は差別に結びつく」といった発想は全く見られない。

さらに、男女差の認識は「男は仕事・女は家庭」といった男女の役割分担や育児における男女で異なった期待に結びつく。「女性は家にいて、子どもを生んで、育てて、というのが当たり前だったが、今はそうでなくなった。子どもがある程度まで育ったら、自分の世界を持つのは正しい」(K.O)という発言は、一見して家事の分担が無くなったとの認識とも受け取れるが、子どもが育つまでは母親が育児を分担することを前提にしている。「家庭では、食事作りなど家事の分担はよくする。台所に入ることに抵抗はない」(I.M)も、基本的に食事作りは妻の仕事であるという前提に基づいている。「男の子と女の子で期待するものが違う。男の子に対しては、長男として家業を継いで欲しいという気持ちがあるが、自分の仕事を持つて自立してくれればよい。女の子に対しては、あまり期待していない。女性の自立は必要だと思うが、最低限の教育を受けて結婚してくれればよい」(N.S)、「女性は家庭の事情で管理職を自ら選ばないだけで、条件が整えば増える。今は、女性だから管理職になるなと言う夫や両親が多い。加えて、子育ても大きい」(F.J)、「家庭を営む場合、男と女で分担した方がうまくいく。育児に際して、男の子には男らしく厳しくしつけ、女の子には優しくしようと最初から思ってた。息子には、自分で決めたことをきちんとやる、めそめそ泣かない。娘には、あれはだめとかこれはだめとか言わないようにした。これは母親の役割」(S.A)、「家庭でお父さんとお母さんが、全く平等に分担されていることもない。夫婦でフルタイムで働いていても、完全に平等に分担されていることもない」(C.H)、「共働きが増えているが、『男は外、女は内』が抜けない」(H.R)、「相談する時に安心感を与えるのが夫の役割」(K.N)、「自分としては『男は働いて、女は家庭を守る』という考え方方に近い。原則的にそうあるべき。しつけや日常の家事を女性がきちんとやってくれているから、お金を稼ぎ、家族を食わせることを、はりきってはつらつとできる」(N.A)、「お母さんにはお母さんの仕事がある。ところが、仕事をほっぽいとして、社会に出ている。お母さんにはお母さんの仕事があって、それを尊重していかねどならない」(K.U)、「母親は育児もあり男性以上に負担がかかる。それに対して行政は、バックアップしていかなければ、小子化の歯止めが効かない」(O.O)等の発言が、現代の状況を代弁しているように思われる。

次に、女性の社会進出や女性の上司・管理職について、どのように捉えているのだろうか。基本的には「女性の社会進出は望ましく、もっと雇用すべき」(Y.A)、「仕事の面に関しては、女性が社会に進出しているのはかまわない」(A.R)、「もっと多くの職場に女性が進出したらよい」(I.M)、「女性の管理職の増加や、女性の社会進出は良いと思う」(I.K)、「もっと社会に進出してもらいたい部分もある」(M.Y)、「社会に貢献したり、家庭の主婦にできないことをする女性は、素直に認めなくてはいけない」(N.A)、「私たちの業界では、女性の進出は率先している」(H.N)等と、いずれも肯定的である。しかし、「女性の社会進出について、男だから女だからという考えはない。できる人間に仕事が集中する」(K.O)と言い切る場合を除いて全ての場合に、条件付きであったり、限定的であったり、時に否定的な結果を指摘することもある。タテマエとホンネの違いであろうか。「た

だ、都合がいい時だけ女を全面におしだすのは良くない。扱い難い。プロ意識に欠けている女性も少なくない」（Y A）、「あくまでも仕事面だけのこと。でも、男性には男性にしかできないことがあるわけですから、全てを女性に取られてしまうとか、リーダーシップを取られてしまうのは、おかしい」（A R）、「ただ、権利だけ主張して行動が伴わないのでよくない」（I M）、「しかし、それで結婚しない女性は、どうなっているのか分からぬ」（I K）、「ただ、子孫を繁栄させるという大変な苦労があるから、それをカバーする男性の立場なり、産休・育児休暇という社会的な制度が必要。しかし、全部勝ち取って、さらに何かを勝ち取るべきというのは嫌い」（M Y）、「女性の地位を高めるというのではなく」（N A）、「大多数の意識が変わらないと、制度だけ出来てもうまくうかない」（H N）。

女性の社会進出の傾向が、「女性の男性化」を引き起こしていると指摘したり、逆に「男性の弱体化」を嘆く指摘も見られる。「女性が男性化している。男性が女性化するということでもある。それが結局だらしないということになっている」（A R）、「男性が軟弱になっている。職場で耐えるということは、女性には分からない。女性が強くなるとか、男性が強くなるというより、実力のある人が強くなればよい」（N S）、「女性が社会に進出する時に男化している。男と同じことをして、自分を中性化しようとする」（N I）、「女子が自信を持つことは良いことだが、逆に男子が幼稚化している」（F J）、「今は、女性が男性化しようとするのを認めるのが平等。それは誤り」（M Y）、「男が女らしさの方に近づいている」（H R）、「男性の基準に近づこうとしているが、人間としてみた場合に果たしていいのか疑問」（K N）等の発言は、いずれも女性の男性化や男性の弱体化を嘆くものである。こうした中で、「男性以上に男性化しないと生き残れないという厳しい企業の論理があり、女性らしさを發揮しつつ、仕事の中で有能さを發揮していくというスタイルができる」（K N）、「女性に社会参加の場が与えられても、社会そのものが男の作ったルールに従っている。その中に入ってきた女性は、それなりに悩むことが多い。男が作った社会にそのまま入ってきても、女性がつくったものではないので、どうしても落ちこぼれてしまう」（K A）と、企業や社会の背景にある男性中心の論理を指摘した発言があったが、残念ながら少数でしかない。こうした視点をどのように認識させていくのか、さらにそれを支える制度やシステムをどのように構築していくのかが、今後の大きな課題と言えよう。産休や育児休暇といった社会制度、女性が普通に仕事をして子どもを預けられるシステム、それを支える行政のパックアップ体制が望まれることは言うまでもないが、それ以前に多くの男性たちの意識変革が問われなければならない。

III-5 メディアについて

過剰なまでに発展した今日の各種メディアは、青少年たちにも大人たちに対しても、計り知れない影響を及ぼしている。『援助交際』という用語も、こうした現代のメディアによって作られ、時に過大に伝えられている。『援助交際』の報道を含めて、メディアの伝え方にに対する大人たちの認識を見てみよう。

メディアの報道の仕方に関して、「雑誌等の煽り方は異常。特に女の子の雑誌は、いやらしい。まるで『援助交際』を煽っているような気がする」（I M）、「どこかで子どもの自殺があったとすると、直ぐにいじめがあったとか無かったとかという報道になる。あったか

無かったかを議論しても意味がない。ただ煽っているだけの報道が目につく」（T E）、「週刊誌なんかで腹立つのは、女子高校生のそういう風俗とかを面白おかしく囃し立て、買う側を奨励するという記事。売れれば何でもいい、儲かれば何でもいいという風潮」（C H）、「女子高校生や女子高校生の『援助交際』を煽っている」（K N）、「カタログなども、ものを煽っている」（I S）と過剰な報道の仕方に対する不満や問題性を指摘する声が多い。これに対して、当事者である雑誌の編集に携わっているものからは「TVとか雑誌の見出しが、いわゆる民衆の不安を煽って、それに答えるほうが売れる。そのことと、問題をいい方向に変えていくというのは別のこと」（H I）と反論的な指摘があったが、民衆の不安を煽って、それに答えるという姿勢については肯定している。その背景にある前提是、その方が売れるという企業側の論理である。

これに関連して、報道の内容自体に偏りがあるとする指摘も少なくない。「取材の仕方や焦点の当た方が歪んでいる。それが社会を歪める」（H O）、「偏った報道を止めて、あまり高校生を取り上げないようにしてほしい。真面目に努力している高校生にとって失礼。渋谷で歩いている高校生だけを見ているのは偏っている」（K I）、「センセーショナルに書き過ぎている。特殊なことを一般的だと言わんばかり。それに惑わされることもある」（F U）、「特異性っていうか、もの珍しさとかね、衝撃的なことだけが瞬時に広まり、それが多くの人たちの姿勢の有り様を作ってしまう」（Y Z）、「作り手が勝手に具合の良いように作っている感じ」（I M）といった指摘である。

こうしたメディアの影響について「性の情報の氾濫は、いい影響よりも悪い影響の方が多い」（A R）、「メディアの影響は強い。テレビ以上に出版物の影響。社会規範を解体している」（K A）と悪影響を指摘するもの、「性表現が盛り込められている雑誌は、一種の緩衝材になっている」（K O）と意見が分かれる。後者の場合、性的欲求を何らかの形で解消することが当然とする男性の論理に裏付けられており、そこで女性がどのように扱われているのかには目が向かない。

さらにメディアに対する規制となると、「メディアの影響は大きいが、規制するのは難しい。作る側を規制するよりも、お互いに考えながら変えていくしかない。自由と規律の問題。自由は好きだが、自ずと規範がある。それを尊重していくのが大切で、法律とは関係ない。メディア側も自分で統制すべき」（Y A）といった意見に集約されるのかもしれない。「アメリカの物真似が多い。しかも部分だけ。公共の電波で裸をやっちゃいけないとかは取り入れないで、自由だけを取り入れている。そういうものを受け入れているから、お金に走っちゃう。お金第一を含め、いろんな悪いものが全部、一つのマスの中に入っている」（H R）という指摘も、規制と自由の混同を示したものと言えよう。

III-6 学校について

学校や教育問題についてどのように考えているのだろうか。受験体制等の教育の体制や制度に言及する発言、教師の質に関する発言、学校の役割や教育の内容に関するもの、教師の指導方法に関するものに大きく分類できる。いずれも、今日の教育に対して不満を吐露するものであり、現代の教育問題への関心の高さとともに、問題の深刻さを示している。

III-6-1 教育の制度や体制について

先ず多く指摘されたのが、受験体制に対する不満である。「豊かな人間教育を目指しているが、受験が目標になっている。受験問題を見ると、テクニックだけが強調されていて、深みがない。学校が面白くないというのは当然」(Y A)、「結局、受験ブーム。競争社会になり、勉強が何にでも優先してきた」(A R)、「進学問題が大きな障害になっている」(K T)、「高校は進学主体の指導体制になっている」(K I)「子どもにとって価値は一面化している。勉強ができるかできないか。いい学校に入れるかどうか。極端な一元化。それに向かってみんなが走った。それで上手くいかなくなつて、大混乱が生じてきた。高校に入ってみても、その先が見えない」(T E)等と、学校が面白くなくなる、競争社会で勉強以外のことがおろそかになったことが、受験体制や進学主体の弊害として指摘され、さらにその背景にある価値の一元化も指摘された。特に T E は、家庭裁判所の調査官としての経験から、「かって問題をおこす子どもは、学習が遅れていたり恵まれない環境だったが、最近はそれだけではない。能力が結構高い子どももいる」と、受験体制による勉強中心の弊害を具体的に指摘する。

「個々の家庭の事情は千差万別ですから、大量生産のように型にはめようとすれば、おかしな所が出てくる。戦後一貫してマスプロ的な教育だった。一人一人に、手作りの教育をすべき。そういう環境を整えるのが国の仕事」(U E)とマスプロ教育として画一化された教育の有り様が問題であるとの指摘や、「一人の教師が35人の子どもの面倒を見ることは無理。子どもも先生の言うことを聞かない」(S E)と現状の40入学級制度の問題性を指摘するものもある。この問題に関して、「学校が制度疲労を起こしている。外的な環境が激変してきているにもかかわらず、明治以来の一斉教育は変わっていない。選択の幅を広げて、不登校にしても、いかないコースも選べるといい。マイナーなものとしないで、進路がもっと複線的になってもいいと思う」(H I)と、一斉教育を変革させるために進路の複線化を具体的に提起する発言も見られた。

さらに入権を重視する現代の教育体制に関して、教員の側からは「システムが成り立たないここまで来ている。子どもの権利ばかり大事にし過ぎて、必要なことをやれば卒業させるけれど、やらなければ卒業できないというように、ドライに割り切つていかないとできないという面もある。個性を重視し過ぎ、好きなことを好きなだけやりなさいと育てているので、一斉授業型の授業が成立しない」(K I)、「学校でも子どもの人権が強調されるようになったが、子どもの人権を尊重することは指導しないことだと。子どもをほったらかせよ。問題行動があつても手をだすとなる。子どもはつけあがるだけ。権利と義務、自由と責任は表裏一体のはず。表現の自由が尊重されるためには、子どもや弱いものの権利を守らねばならないという権利も存在する。そのへんが非常にアンバランス」(C H)と、偏った権利の主張によって指導が困難になっている状況が指摘される。これに対して「教師にも権限を与えて、先生方が過敏になり、尻込みするようなことはやめて欲しい。人間を差別しない、平等である、権利の主張と、その辺とが関係している」(H N)と、権限を持って尻込みするなという要請もなされる。教育において子どもの権利をどのように考えていくべきかが、改めて今日的な問題となっている状況を示す指摘といえよう。

こうした教育の制度や体制を生み出してきた背景として「戦後の改革それ自体が、政治改革であれ、経済改革であれ、倫理・モラル、家族生活の改革であれ、上滑りというか、言わ

れたから受け入れただけ。教えろって言わされたから学校で教えただけ」（Y Z）と、戦後の教育改革それ自体の問題を指摘する発言も見られた。

III-6-2 教師の質について

特に、人生経験の足りない若い教師に対する不満が見られる。「教師の中には、人生経験の少ないものがいる。去年まで大学生で、いきなり子どもを教えることは無理。その場の人間感情で人をリードすれば、必ずぶつかる。年配の教師には、子どもから慕われるものがいる、人生経験の差」（Y D）、「教師は聖職者という意識をもつ必要がある。ただ、学校を卒業して直ぐに学校の先生になっても、大人になりきれない子どもという感じがする。一度社会に出てから教職に就けるシステムができれば、是正されるかもしれない」（S A）等の発言は、大学卒業後に教師として子どもの指導者になること自体に無理があることを指摘したものである。「先生から変わらなくてはだめ。先生が生き生きしているところを見本に見せないで、生徒がどうして生き生きできるのか。先生が幸せそうな顔をしなくて、なんで生徒に幸せになれと要求できるのか」（U N）という指摘も、教師自身が生徒に対して見本とならなければならないと強く望む発言であるが、そのためにも人生経験が問われてくる。ただ、「教師になってから育つ場や育てる人が減っている。P T Aも教師を育てようとしていた」（F J）という指摘のように、若い教師を育てようとする雰囲気が無くなってきたとの指摘もある。若い教師をいかに育していくのかは、養成機関の問題とともに、教育現場や現場を取り巻く周囲の問題であると言えよう。

さらに日常的な教育活動に対する不満も少なくない。「最近、教師がサラリーマン化している。人間的、情熱的な教師が少ない。教室の後ろで騒いでも、注意しない教師や子どもに対するコメントを書かない教師もいる。教師の質にはらつきがある」（S I）、「教師に限らず、大人は、思い切ったことができなくなってしまった。自分のスタンスが無く、サラリーマン化してきた。生きるモデルとしての役割を示せない」（E G）等と教師のサラリーマン化を嘆く指摘、「教師に物足りなさを感じる。人格者みたいな教師が、最近、少なくなってきた。かって、放課後に非社会的なことも自由に話し合えた教師がいたが、今は少なく、授業以外のことを教えられない」（K A）、「教師の指導力が問われる。指導陸のある教師が揃っている学校は、子どもがきっちりしている」（K U）と人格者としての教師や指導力のある教師が少なくなってきたことを指摘するものである。

「人間関係やコミュニケーションがとれない若い教師が多い。自分の自己主張ばかりして、相手の気持ちを思いやったり、相手の意見を聞かない。聞くコミュニケーションの取り方が下手。話のやりとりをしないで、投げたきり」（O O）との指摘は、教育者として教師に期待される資質以前の問題でもある。

III-6-3 学校での指導の内容について

学校で何を教えるのかという指導内容に関しては、「学校で出来ることをもう少し限って、あれもこれも全て学校のせいと言わずに、教科教育はできるが、それ以外の人間的な成長とかは学校だけに任せておくのは不自然」（H I）「学校は基本的に勉強を教えるところ。基本的な躾けの部分は、今の制度では出来ない。教科の勉強以外に、社会の中でどうあるべきか、一人の人間としてどうあるべきかが、学校でも家庭でもおしえられていない」（N I）、

「学校は、学校という枠の中で教科や団体生活の指導をする場。それ以外は、先生の手を離れて行動してしまう。日頃の家庭の教育、躾けが問題となる」（F U）と、学校での指導内容には自ずと限界があることを指摘するものもあるが、教科の勉強以外に人間的な資質の指導を望む声も少なくない。「勉強が出来ないのは一つの形であり、人生の中でたいして意味のない一瞬のこと。勉強は出来なくとも、問題意識を持つことが大切」（Y A）、「出来の悪い子どもに対して、もう少し教え方等面倒を見て欲しい。勉強以外にも、きちんとした躾けを教えて欲しい。自分たちには時間がないし、能力も無いから、学校に期待するものは多い。性教育についても、家庭と連絡を取りながら、ある程度までいろいろと教えて欲しい」（N S）、「核となる教えを、戦後、放棄してしまった。代わりに、民主主義や自由という思想が入り込んだ。それ自体はいいことだろうが、人生の先輩に敬意を払うという核を失ってしまった」（I N）、「人間としての生き方の平等さとか、厳しさとか、長い将来のプロセスとしての発達とか、そうした意味がきちんととられるに至らない形で、現象的に受け入れてなされている」（Y Z）等の指摘である。

III-6-4 指導の方法について

教師の指導方法に関しては、体罰をめぐる発言に集約される。体罰そのものは否定されるべきとしながらも、相互の人間関係によっては必ずしも否定されないとする発言や、時に必要となる場合もあるとする発言が見られた。「体罰についても、一概に悪いとは思わない。体育会系のクラブを経験したこともあり、時には体罰も効果的になることがある」（K T）、「体罰についても、両者の人間関係が問題。一方的に愛のムチだと言っても通じない」（F J）、「よその子を預かっているという限界もあるが、厳しくしなければということを聞かない子もいる。体罰についても、絶対に先生は手を挙げないことが分かっているので、挑発してくる場合もある」（K I）、「昔のように先生は体罰を使えないし、子どもも自己主張するから、体罰そのものは良くないが、それ以外で子どもの面倒をみれば『良い先生』となつくこともある」（S E）。

その他、次のような教師の発言は、最終的に教師としての指導の有り様は個人の姿勢に帰結するという指摘である。逆に考えれば、それだけ今日の教育現場において、教師個人が悩んでいるとも受け止められる。「どんなに教師として近づこうとしても、大人である限り、距離がある。子どもの中に入っていき、仲の良い先生だ、友だちのような先生だと言われること自体にマイナス部分がある。真剣に接した時、どう対応できるのかなと考え込んでしまう。子どもたちが悪いことをして見逃してしまうと、その先が怖い。あの先生は許してくれたから、いいんだと判断してしまう。意識的に駄目なものは駄目だと言う必要がある」（M Y）、「何を考え、どう行動するか、どういうポリシーをもっているかを一個の人間として見て、おかしかったら、大人も一個の人間として、おかしいと言えばいい。個人の立場を保証することで、教師も素直に言える」（H R）。

III-7 家庭について

家庭についての発言を大別すると、家庭の機能や役割についての発言、共働きの影響も含めて父母の役割を言及したもの、親自身の質的な変化に言及したものに分ける事が出来る。

ここでも、学校に対する不満と同様、今日の家庭や親の有り様に対する不満の声が多い。特に、子どもの問題以上に、子どもを育てる側にある親自身の問題性を指摘する声が多く聞かれた。

III-7-1 家庭の機能や役割について

「基本的な躾けは、家庭でおこなうべき。ただ、集団生活のルールについては、家庭で出来ないので、学校で。他人に迷惑をかけない、人に優しく、助け合はうは教えられても、どうして人を助けるか、関わり方については、実体として教えられない」（Y A）、「基本的な道徳心は、小学校の低学年までに作られるが、家庭でなされていない」（Y D）、「集団指導は家庭で出来ないので、家庭は家庭として自分の子どもとしてきちんと育てる」（S I）

「家庭のしつけや雰囲気が大きな影響を持つ。家庭環境を見てかわいそうな子どもがいる。小さい頃から、あっちぶつけ、こっちぶつけでくれば、いろいろ歪んでしまうのもしょうがない」（K I）、「躾けはあいさつをするところに基本がある」（F U）（N A）、「朝食は必ず子どもと食べるとか、話す時間が必要。夫婦喧嘩は子どもの前でしてはいけない。口うるさいことは絶対言わない。『俺はおまえたちを注意して見ている』ということを言葉には出さず示す」（H R）等に見られるように、あいさつや道徳心等の基本的な躾けは家庭が担うべきだとする発言が多い。「先生に任せた以上、任せればよい。躾けも含めて任せたらよい。家に帰ったら、家でもちゃんとする。相互のコミュニケーションは必要」（H N）という発言も、家庭は家庭なりに躾けの重要性を認めている。

さらに次のような、自由と責任との関連に触れながら、日本の特徴を指摘した発言も見られた。「肉親、関係縁者から教えてもらったものがたくさんあった。その時はうるさいと思っていたけど、今は貴重に思える。今は、親が子どもに教えきれないことが、情報過多のために、たくさんある。親も子どもも、自由主義の履き違えをしている。欧米では、個人が責任を取ることだが、日本の場合は、親も子どもも責任を取ってない」（A R）。

III-7-2 父母の役割について

共働き夫婦の増加を反映してか、母親の就業に伴う家庭の中での母親役割の低下を嘆く発言が見られた。「共稼ぎが増えてきたが、自分としては反対。子どもが中学生になったら良いが、それまでは両親のどちらかが一緒に生活して話を聞いてあげ、躾けや基本的な価値観・道徳観を育てることが大切。生活が苦しくて共稼ぎというよりも、親のエゴでより豊かなものを求めている」（S I）、「共働きしている人もいるが、ある時期までは親の責任」（N S）、「お母さんが働きに出ることはいいことなんだろうけど、同時に家庭での母親の教育が無くなつた。食事の用意や準備とか、日常の基本的な生活行動パターンがなされていない。経済的な側面だけで女親が外に出るのは疑問に思う」（K U）等の発言である。

父親と母親の役割を区別して言及するものも多い。「母親の躾け方が問題で子どもは良く見ている。母親はたとえ仕事を持っていても、毎日ご飯を作るなどで子どもと接触することが大切。自分の思い通りにならないことに口うるさいと、子どもは反発する。子どもの気持ちを推し量って対処していく方法に欠ける。話す機会も一緒にいる機会も、母親が一番多い。」（Y D）、「男親の役割は、決断の時や最後の話し合いの時に、きちんとすること」

(N S)、「父親や母親が子どもに対して、女と男の良い関係といったモデルになっていない。企業社会の問題があり、男がほとんど家にいない。戦後は父親がボスであるという意識がなくなった。子どもに干渉せず、自由意志を尊重し、自分の道を見つけてくれればという意識で、子どもが自ら成長していくのを見守る意識が強い。でも、自由意志を自ら伸ばせる基本的な力を育てていない」(N I)、「父親の子どもに対するかかわりが少なくなった。父親の権威とか家庭のバランスが示せるような家庭行事もなくなってきた。家を代表するのは父親で、家の中を細々と管理するのは母親」(S A)、「父親が会社を重視しているのも、家族のためにになっているという自負があり、そういう親父の背中を見て子どもは育ってきた。今の若い人は、仕事よりも家族を優先するようになった。それはそれで良いこと。会社の仕事が忙しい時には会社に行ってばかりかもしれないが、仕事の暇な時には子どもの遊び相手になるというメリハリを、子どもが感じられれば良いこと」(U E)、「特にサラリーマン家庭で、父親の存在を感じることが少なくなった」(C H)、「父親不在的なところが多い。社会全体に絶対尊敬できるものがない。子どもを押さえる存在になつてないので、それを乗り越えるエネルギーを作り得ない。父親は存在しているが、父権的な父親がいない」(M Y)、「父親は、母親と同じ接し方は物理的に無理。同じ男の立場として、苦しみなり悲しみを共通に分かり合えるようになりたい」(F U)、「母親が小学生を連れてカラオケ等に行き遅くまで飲んで、歌っている。女性の解放として捉えればそれで良いのかもしれないが、何でもありみたい」(K N)、「父親の役割が失われ、母親の役割が肥大化している。何かを断ち切るとか、断ち切ることを支援していくという父親の役割がとれていない。母親の役割は、誕生から母親の愛で包んでやること。父親は、企業戦士として仕事を口実にして、家庭の問題に責任をもって対処してこなかった」(H I)、「家庭で一番大事なのは父親のあり方。家庭内の問題は父親がしっかりとすれば問題ない」(K U)等の発言に見られるように、多くは父親の不在や父親としての権威の喪失を指摘する。仕事を口実にして家庭を振り返ってこなかったという指摘もあるが、仕事中心になるのも結局は家庭を思つてのことという、男性中心の論理が展開されている。さらに、母親が十分にその役割を果たしていないと嘆くのも、男性（父親）としての一方的な論理と言えよう。

III-7-3 親の質的な変化（幼稚化）について

親自身の躊躇が出来てなく、幼稚化しているという指摘が多く目についた。子どもの問題というよりも、親側の問題であるとの指摘もあり、子どもの問題が社会の鏡であることを裏付ける発言と言えよう。

先ず親自身の躊躇や基本的生活習慣のなさ、幼稚化を指摘するものとして「親の基本的な躊躇がなされていない」(K T)、「親が幼稚化している」(F J)、「親がその親から躊躇をされていないので、幼稚化し、基本的な躊躇ができていない」(S A)、「親に非常識な人が増えた。親同士で揉めることも増えた」(C H)、「子どもと一緒にいる時間が長くなり、親という立場でなく友だち的な立場に置こうとする。現象的に幼い」(M Y)、「大人の中には、子どもの躊躇よりも、自分自身の躊躇が問題だと思われる人が大勢いる」(F U)、「基本的な生活習慣を身につけないで育ってきてている。挨拶のできない親」(O O)等がある。

自分の子どもだけを自己中心的にしか見れない親を指摘するものもいる。「卒業式等でも、

ビデオを撮ろうとして、傍若無人。自分の子どもしか目に入らない。親に社会のルール、モラル、エチケットを守らせる必要がある。基本的なしつけ機能が、親も社会全体も極端に低下している」（K N）、「学校の運動会等で、親の自己中心性を感じる。親が学校に対して過剰に罪や損害を要求し過ぎる」（H N）、「特に高学年の場合に、親が子どものことを知らない。日曜日に塾に通わせる親は、いい学校やいい進学校へやりたいということだろう。勉強さえ出来ればいいという親自身の考えで、自分の子どもを中心にしか見ていない、周りと人付き合いをしない。友だち関係で自分の子どもがいじめられたりすると、すぐに結果を求めるがる」（K U）。

親自身が自分の楽しみを追求するあまり、子どもがその犠牲になっていることを指摘するものもいる。「親が二人とも遊んでいるから、しょうがない」（I M）、「子どものことよりも、自分の人生を楽しむことが中心。こうした子どもは、大人に不信感を抱く。この子をかわいいと思ったことが無いということを、平気で言う母親。子どもが投げやりになってしまって無理ない」（F J）、「小さい子どもをカラオケ等に連れてくる。子どもは、自ずと夜の遅い時間の生活や、夜遅くまでそういう場所で遊ぶことを体験で覚え、大きくなった時に、違和感なく受け入れるようになる」（N A）、「最近は、家族同士で飲み屋に来る。親同士で飲んで、子どもは子ども同士で。子どもが騒いでも、親はすいませんとは言わない。親の都合で子どもは無視されている。子どもは、そうなると勝手な子どもになる」（S E）。

その他に、「具体的に『援助交際』をしていることが分かれば、親はショック。しかし、その前段階での男女の有り様について、親は無関心というか許容的。親は見て見ぬふりをしている」（T E）と子どもに対する無関心を指摘するもの、「親は、子どもに対して、親として言うべき義務があり、何でもOKすることではない。この点が最近曖昧になり、叱ったりしない親が多い。大人たちに自信が無いのかもしれない。叱ることはエネルギーを必要とする。そんなエネルギーを使うのは面倒で、使いたくないという感じ」（S A）と親に自信が無くなっているという指摘、「小子化の原因の一つに、親のわがままがある。豊かな生活をエンジョイするため、子どもは一人でいいという親のエゴが小子化に拍車をかけた」（U E）と親のわがままを指摘するもの、「親が子どもに求め過ぎ、自分は、平気で無駄をするし、お金を使い過ぎている」（H R）と子どもに対する過剰な期待と親自信の無駄遣いの指摘するもの、「親自身がよりどころを持たねばならない。人生の目標をかかげる。そのためには、核になるものが生まれてこないと実現出来ない。目標がないから、核を持つ必要性を感じない。それと、親子のコミュニケーション。親子の会話が展開してないと、逃げ場として、カラオケや居酒屋に行ったり、紅白歌合戦見たり、会話が苦手だという日本人の現れだと思う。歌を一方的に歌って、みんな歌い終わったら「バイバイ」。スピーチが下手で、できない」（I N）と人生目標を失った親とコミュニケーションや会話が苦手な親を指摘するもの、「親が、子どもの方に歩みよって、友だち感覚になり、上下関係がなくなった。子どもも、そういうことを見抜いている」（I S）と親子関係が友だち関係になってしまったことを指摘するものと多様な指摘がなされた。

こうした親たちを育ててきた世代にも責任があるとする次のような指摘は、今日の親の問題を解決することの困難性や複雑性を示すものである。現代の若者の問題が、社会や大人の反映であり、彼らがそうした社会の犠牲者であるとするならば、彼らを育ててきた親も又犠牲者なのかもしれない。「団塊の世代の子どもたちから、校内暴力などいろいろな問題が始

また感じがする。その世代は、家庭のことを顧みなかった傾向が強い。今の社会の問題、社会の風俗、『援助交際』なども、その世代が作っているという感じがする」（K A）、「今の子どもたちの親がどのような社会的背景で育ってきかに加えて、その親の親がどのような社会的背景で育ったのかも大事な視点。今の子どもの親世代は、高度経済成長期の真っ盛りに育った。その親たちは、敗戦前後の混乱期に育ち、大人として高度経済成長を支えてきた世代。その中で、子どもに対しても一面的であったり、子どもの気持ちを捉えるゆとりもなかつたし、対応できなかつたのかもしれない」（T E）、「戦前の日本の教育では、自主性を悪として、育てられてきた。当時の大人は、戦後の変動の中で、捨てなくてもいいものまで捨てて、1950年以降になると、捨わなくともいいもの、捨ってはいけないものまで拾ってきた。経済社会の状況変化を目指して、問われなければいけなかつた時期に問われないままできた。その一番大きいものの一つに、家庭生活の有り様がある」（Y Z）。

IV. まとめと今後の課題

今回の面接の対象は、可能な限り広い範囲から抽出したが、完全なランダムサンプリングによるものでなく、その意味で大人の意見を集約するものではい。しかし、33人の男性社会人の面接を通して、『援助交際』に対する大人の捉え方、『援助交際』の相手をする大人に対して大人側がどのように見ているのか、さらに若者を取り巻く学校や家庭についての大人的考え方等の一端を伺うことができた。それぞれに対する大人の嘆きや不満は、あるべき姿や期待の裏がえしに他ならない。これを切り口にし、今後、ランダムサンプリングに基づいた大量データの分析がなされるならば、『援助交際』等現代の若者たちの問題に対する社会的対応のあり方が具体的になっていくものと考えられる。

以下、『援助交際』という社会現象についての捉え方、『援助交際』の相手をする大人に対する捉え方、男女平等に対する捉え方、学校（教育や教師）に対する捉え方、家庭（親）に対する捉え方について、今後の分析の視点を念頭に置きながら整理してみよう。

（『援助交際』についての捉え方）

『援助交際』をする理由に関して、「お金」を欲しがっているからという捉え方が多い。しかし、この年令の子どもたちの多くがお金を欲しがっているだろうことを考えれば、この理由だけで『援助交際』に走る子どもとそうでない子どもの違いを説明することはできない。何故「お金」を欲しがるかについて、豊かになった現代の物質社会の影響も指摘されるが、物の豊かさを享受しているのは大人も同様である。どのように子どもたちを育てていくのかという、親の愛情や教育の問題として一般化される傾向があるが、その前に、物質社会や豊かな社会に生きる親側の生活態度を明らかにする必要がある。

『援助交際』に走る子どもは、言語的なコミュニケーション能力に欠けることが指摘された。この指摘は、子どもたちだけに当てはまるものでもない。家庭の中で、子どもたちとどのようなコミュニケーションが展開されているのかが問われる。

『援助交際』を生み出している社会的原因として、豊かな物質社会の影響に加えて情報過多の影響も指摘された。特に性情報の氾濫は、『援助交際』と直接結びつきやすい影響と考えられる。ここでも、子どもたちへの影響を考える前に、性情報の氾濫を招いている受け側の姿勢が問われる。情報の送り手の意識とともに、受けてとしての大人の態度の中に、それらを期待する姿勢があるのではないかという問題である。性に対する大人の姿勢とも言えよう。これは、メディアの規制に対する問題とともに、氾濫する性情報の中で子どもをいかに育てていくのかという問題に結びつく。

『援助交際』のもつ問題性をどのように認識しているかは、『援助交際』に対する具体的な対応と結びつく。『援助交際』と売買春を同義的に捉えているのか、同義的に捉えるとするならば、売買春の何が問題となるのか、男女平等との関連をどのように考えるのか等々が明らかにされなければならない。これは、『援助交際』を止めさせるために論理的にどのように子どもたちに説得するかという問題に通じる。単なる感情的な叫びだけでは、『援助交際』を一掃することは難しい。

（『援助交際』の相手をする大人について）

同じ大人として、『援助交際』の相手をする大人をどのように考えているのだろうか。自

分とは無関係として、否定的に嘆いてみても問題は解決しない。需要があるから供給すると、大人側の責任を指摘する声の中に、果たして自分自身の中の問題が含まれているのだろうか。男の心理や本能として一般化する捉え方の中に、自分自身の中にある意識を合理化する姿勢が含まれていないのだろうか。売春を最古の歴史としたり、風俗店にかかる男や若い女性を好む男性の心理を「男だから」と一般化する捉え方は、あまりにも男社会の男の論理でしかない。男性自身の中にある性に対する男性の意識を明らかにする必要がある。ここでも、人権や女性差別との関連が問題になる。

さらに、娘の有無との関連性が指摘されるが、娘や子どもの有無が『援助交際』に対する態度や性意識と関連しているのだろうか。自分の子ども世代を性の対象にする背景に、「男だから」という合理化が作用していないのだろうか。又、行政による法的な規制に対する考え方も問われなければならない。これは、若者のみならず大人に対する具体的な対応策と結びついた問題である。

(男女平等について)

前述した問題を明らかにするためにも、男女平等に対する大人の認識が問われなければならない。現代社会は未だ男女平等になっていないとする認識が多いが、それぞれの考える男女平等の中身はどのようなものなのだろうか。多くは、男女差や男女の役割を認めた上で、お互いが尊重し合うというものであった。しかしその中には、本人自身が気づいていない差別的、ステレオタイプ的な違いを前提にしているものも少なくない。「男は○○、女は○○」といった固定観念に囚われているといっても良い。前述した「男だから」という発想を生み出す囚われもある。平等と考える根拠や不平等と考える根拠を明らかにし、差別と区別の違いを指摘する場合にも、区別と考える中に差別が含まれていないのかを明らかにする必要がある。

女性の社会進出や女性管理職、女性の上司をどのように考えているのかも、具体的な問題として重要である。特に、女性の男性化が指摘されるが、男女の役割の認識と関連する。男性の認識と『援助交際』についての認識との関連を明らかにすることも重要な課題となる。

(学校について)

学校教育が抱える今日的な問題を反映してか、教育の制度や体制、教師の質、学校での指導内容や方法をめぐって、多く不満が指摘された。それは、客観的にみる限り、いずれも納得のいく指摘ばかりである。しかし、それらを支えている側にある大人として、客観的に問題を指摘するだけでは解決に至らない。受験体制や教科の勉強が中心となり過ぎているとの指摘の背景に、大人自身にもそれを期待する部分がないのだろうか。教育の画一化や人権尊重の欠如を指摘するならば、自分自身の問題として自らが個性的に生きているのか、人権を尊重しているのかを問う必要がある。

教師の質の低下や教育内容・方法について現状を嘆くならば、あるべき教師像や教育内容・方法として、何を期待しているのかを明らかにしなければならない。

(家庭について)

現代の若者を育てている親自身に、基本的生活習慣やマナーといった躊躇が欠けているとの指摘が多くなされた。これはさらに、そうした親がどのように育てられてきたのかという問題を提起する。大人が、家庭の機能や役割をどのように捉え、期待しているのかを明らかにするとともに、大人自身がどのように育てられてきたのかも明らかにする必要がある。

さらに、親自身が子どもを無視して楽しむ傾向があることも指摘された。小子化の背景に親のエゴイズムが見られるという指摘もある。だからといって、子どもに必要以上に歩み寄り、子どもと同じレベルで遊ぶ親も問題である。いずれの親も子どもにとって大人としてのモデルを示し得ない。子どもにとって親は、乗り越える対象であり、乗り越えるための葛藤が子どものエネルギーを生み出すのではあるまいか。

果たして、親として大人として、どのような生活態度が必要になるのだろうか。

以上、今回の面接を通してなされた指摘から、今後、解明されなければならない課題とその視点を提起してきた。「子どもは社会の鏡」であるという認識をすることの重要性が、改めて確認できた。当然、『援助交際』の場合には一方の当事者である大人の姿勢が問われなければならない。しかし、『援助交際』に限らず子どもたちが直面している問題の多くは、実は大人の問題でもあることが少なくない。

今回の調査を前提にして、大人の意識とその背景要因の解明が不可避となる。

引用文献

- 福富護 1997 いわゆる『援助交際』に対する女子高校生の意識及び背景要因の分析研究
(財)女性のためのアジア平和国民基金
- 福富護 1998 『援助交際』に対する女子高校生の意識と背景要因 (財)女性のためのアジア平和国民基金
- 藤井良樹 1998 『援助交際』したいオトコたちと「買春処罰規定」 APA! 1998/1/21日号
p. 115-119
- 原田真知子 1997 「セックスしよう」というと何で恥ずかしい? 子ども向け性情報の氾濫なかで ひと 25(4) 特集パートⅡ ポスト・バブルの若者たち 商品化される性 p. 75-81
- 原田留美子 1997 少女たちと学ぶセクシュアル・ライツ つげ書房新社
- 速水由紀子 1998 援助交際を選択する少女たち 宮台真司(コーディネーター)「生の自己決定」 言論 紀伊国屋書店 p. 15-38
- 樋上典子 1997 中学校 学習の計画と実践『援助交際』アンケートを事前にとてパネルディスカッション 性と生の教育 11 特集『援助交際』と性教育 p. 44-49
- 河合隼雄 1997 日本人の心のゆくえ 第9回『援助交際』というムーブメント 世界 3月号
p. 137-148
- 菊島充子・松井豊・福富護 1999 『援助交際』に対する態度 -雑誌や評論の分析と大学生の意識調査から- 東京学芸大学紀要第1部門 p. 47-54
- 河野美代子・内田良子・川名紀美 1998 座談会 援助交際で深呼吸する少女たち 論座4月号 特集 援助こうさいする娘へ p. 12-23
- 丸山慶喜 1997 高校学校ぐるみの性教育 実践総合学習「性と生」で売買春の問題に多面的にアローチ 性と生の教育, 11. 特集『援助交際』と性教育 p. 26-33
- 宮台真司 1994 制服少女たちの選択 講談社
- 宮台真司 1998 援助交際 「学校化」が売春やりたい女の子を生み出す 尾木直樹・宮台真司 学校を救済せよ 学陽書房 p. 160-193
- 宮台真司 1997 世紀末の作法 終ワリナキ日常ヲ生キル智恵 リクルート・ダ・ヴィンチ編集部
- 宮台真司・藤井良樹・中森昭夫 1997 新世紀のリアル 飛鳥新社
- 宮淑子 1998 性の自己決定とフェミニズムのアポリア 宮台真司(コーディネーター)「性の自己決定」 言論 紀伊国屋書店 p. 75-106
- 永田えり子 1997 道徳派フェミニスト宣言 効草書房
- 永田えり子 1998 買春男性の「再生産責任」を免除する理由ない 論座4月号 特集 援助交際をする娘へ p. 44-47
- 中野翠 1997 宮台真司 援助交際少女をなぜ叱らない 諸君 29(2) p. 92-96
- 岡田教一郎・山下泰 1997 中学校 学習の計画と実践『テレクラと援助交際』 危険性にもふれ、人間関係を豊かに築く力を育てたい 性と生の教育, 11. 特集『援助交際』と性教育 p. 50-53

- 大平健 1997 「対論・援助交際」の研究 季刊へるめす 66 p. 193-199
- 庄子晶子・島村ありか・谷川千雪・村瀬幸浩 1997 東研ブックレットシリーズ 性を語る
No. 2 援助交際の少女たち どうする大人? どうする学校? 東研出版
- 若尾典子 1997 間の中の女性の身体 性的自己決定権を考える 学陽書房
- 山本直英 1997 時評+α 「援助交際」する男(オヤジ)たちへのメッセージ 性と生の教
育, 11, 特集「援助交際」と性教育 p. 74-77

(財) 女性のためのアジア平和国民基金 (アジア女性基金)

アジア女性基金は、1995年7月、日本軍が関与して「慰安婦」とされた被害者の癒しがたい苦しみを受け止め、少しでもその苦しみが緩和されるよう力を尽くし行動することが、耐え難い犠牲を強いた日本の責任を表すとの認識から、市民と政府が一体となって発足いたしました。従って、基金の目的の一つは、「慰安婦」制度の被害者への国民的な償い事業です。それは、1) 被害者の方々の苦悩を受け止め、心からの償いを示す事業、2) 国としての率直なお詫びと反省の表明、3) 政府の資金による医療・福祉支援事業、4) 「慰安婦」問題を歴史の教訓とするための事業です。被害者の方々は、長い間沈黙を強いられ、高齢となられた今、償いに残された時間は限られています。そのため、アジア女性基金としては、一刻も早く日本の道義的責任を具体的に表したいという気持ちで、この事業に取り組んでいます。

同時に、女性に対する差別や暴力が「慰安婦」問題を生んだ背景にあるとの認識から、アジア女性基金のもう一つの目的は、今日的問題である女性への暴力あるいは人権侵害に対して、積極的に取り組み、二度と「慰安婦」問題を生まない社会を作る事業です。その活動には：

- 女性が今日直面している問題についての国際会議の開催
- 女性の人権問題に様々な角度から取り組んでいる女性の団体への支援活動
- 女性に対する暴力、あるいは、女性に対する人権侵害についての原因と防止に関する調査・研究
- 暴力や人権侵害の被害女性に対するカウンセリングおよび自立支援等があります。

基金の事業や活動についてのお問い合わせ、出版物のリスト等をご希望の方は、下記の住所にご連絡下さい。なお、インターネットでも基金の活動はご覧になれます。

住所：107-0052 東京都港区赤坂 2-17-42

TEL: 03-3583-9322 FAX: 03-3583-9321

e-mail: dignity@awf.or.jp website: <http://www.awf.or.jp>